
くじびき勇者さま 外伝 誰が真優勝者だ！？

あきらたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くじびき勇者さま 外伝 誰が真優勝者だ!?

【Nコード】

N8639P

【作者名】

あきらたろう

【あらすじ】

HJ文庫から全11巻が出ている「くじびき勇者さま」の二次創作です。

原作では地味な勇者さまと化したナバル・フェオールを主役にします。

第一章 帝国剣術大会開催決定

アルテース西南戦争、世界大戦と立て続けに起こった戦争が終わり、東大陸のサクラス王国連合帝国では戦後復興と経済成長が起きていた。

戦争のために帝国全土に張り巡らされた鉄道網と有線放送網は、経済を成長させ、経済的に余裕のできた帝国社会では、様々な新しい娯楽が生み出されていた。

その一つが剣術大会であった。

剣術大会そのものは、古くからあり、アルテース西南戦争と世界大戦で多数の新兵器が開発されたため、剣術の価値が著しく下がったため剣術大会そのものも廃れるかと思われていた。

しかし、ある地方の小さな剣術大会を有線放送で実況放送したところ、大人気を呼んだ。

写真雑誌では、出場した剣士たちの写真が掲載され、特集記事が組まれるようになった。

新たに発明された映画では、映画館で剣術大会を撮影した映像が上映され、それも映画館を満員にする大人気であった。

以前は、剣術大会の開催される会場が遠くて見に行けなかった人も、鉄道により短時間で移動できるようになったため、会場に来場する観客の数も急激に増加した。

剣術大会に出場する剣士は、スポーツのスター選手のように扱われるようになったのである。

帝国で一番大きな大会は、帝都サクラスで開催される帝国剣術大会であるが、デスペラン騒動・アルテース西南戦争・世界大戦により、ここ数年は中止されており、今年久しぶりに開催される大会は、大きな期待を持たれていた。

そして、今、前回の帝国剣術大会の準優勝者が報道陣に囲まれていた。

「勇者さま！前回の大会の準優勝者として、今回の大会に向けて何かコメントを！」

報道陣に取り囲まれているのは、勇者ナバル・フェオールである。

ナバルは面倒くさそうに答えた。

「俺は、準優勝だったんだ。インタビューするなら、まず優勝者の方に先に行くべきだろう」

「しかし、勇者さま。前回の大会の優勝者は今だに行方不明ですからね」

その新聞記者の言葉にナバルは怒った。

「あいつは行方不明になっているんじゃない！剣の修業の旅に出ているんだ！」

ナバルの剣幕にも怯まずに、新聞記者は質問を続けた。

「前回の大会の決勝戦で本当に勝ったのは、勇者さまだという話も……」

ナバルはさらに怒った。

「あの勝負は俺のハッキリとした負けだ！あいつが勝ったんだ！勝負にケチをつけないでくれ！」

その後、ナバルは報道陣を無視したまま、西アルテース公国の王宮であるコスモス宮の中に入って行った。

「凄い報道陣の数だったわね。ナバル」

西アルテース公国の女王である聖女メイベル・ヴァイスは、ナバルと一緒にコスモス宮に入ったのだがメイベルには報道陣は誰一人として、近づかなかった。

常に注目を集める彼女としては、新鮮な体験だった。

「普段のわたしの気持ち分かるでしょ？人の注目を浴びるのなんて、わずらわしいでしょ？」

「ああ。メイベルが大統領や女王になるのを嫌がっていた気持ちが分かるよ」

二人は執務室に入ると、それぞれの書類仕事を始めた。

「ねえ。ナバル。ナバルは準優勝だったのよね？と言う事は決勝戦で負けたのよね？」

「そうだ。あれは間違いなく、俺の負けだ」

ナバルは自分が負けたことを悔しがるのではなく、むしろ誇るように言った。

「さっき、新聞記者さんが本当に勝ったのはナバルという話もあるって言ってたけど、どういう意味なの？」

ナバルは難しい顔になった。

「俺の口からは言いにくい。クリプトン卿に聞いてくれ」

ちょうど、そこに西アルテース公国の執政責任者であるクリプトン卿が部屋に入ってきたので、メイベルは質問した。

「ふむ。あの決勝戦のことか、拙者も観戦していたが、あれは凄まじい剣の試合であつた」

クリプトン卿は語り始めた。

決勝戦でのナバルの対戦相手の名前は、オクトー・アグディカニス。当時、西アルテースの公王だったビースマス卿自慢のお抱え剣士である。

オクトーは帝国剣術大会に二回連続優勝しており、その大会で三連覇なるかどうか、注目されていた。

ナバルも初出場で決勝進出ということで、注目されていた。

「メイベル。少し、話は横にそれるが、オクトーが最初に優勝した大会で疑惑が持ち上がったことがある」

「疑惑って何ですか？クリプトン卿」

「決勝戦以外は試合時間に制限があり、制限時間以内に決着が着かない場合は、審判の判定で勝敗が決まるのだから……ビーズマス卿が自分のお抱え剣士であるオクトーを勝たせるために審判を買収したのではないか？という疑惑だ」

「本当なんですか！？そんな不正行為が行われたのは？」

メイベルは、驚いて大声を出した。

そこに、ナバルが口を挟んだ。

「メイベル。オクトーのヤツは、そんな卑怯なことをするヤツじゃない！」

クリプトン卿がナバルにうなずいた。

「うむ。ビーズマス卿が審判を買収しようと考えたのは事実のようなのだが、さすがに側近に止められて実行はしなかった。オクトーは全く不正に関わっていないことは、判明している」

クリプトン卿は話を戻して、ナバルとオクトーの間で行われた決勝戦の模様を詳しく話した。

その日の午後一時に開始された試合は、六時間経過した午後七時に

なつても決着がつかなかった。

なぜなら、ナバルとオクトーは試合開始の合図があつてから木刀をお互いに構えたまま、ピクリとも動かずにらみ合つていたからである。

「何故？六時間も動かなかったの？ナバル」

メイベルの疑問にナバルが答えた。

「オクトーのヤツが、一撃で俺をノックアウトするのを狙つていたのは分かつていた。俺もオクトーも動きの速さは同じぐらいだ。俺がつかつに先に動くと、隙ができて、そこを突かれてやられてしまう。だからオクトーに先に隙ができるのを待っていた」

「何故？オクトーさんがノックアウトを狙っているって分かつたの？」

このメイベルの疑問には、クリプトン卿が答えた。

「オクトーは買収疑惑をかけられてから、一言も弁解するようなことはしなかったが、それ以降の試合では判定に持ち込まれたことは無い。全てノックアウト勝ちだ。誰も疑惑をかけられないノックアウト勝ちをすることで自分の実力を証明しているのだらう」

ナバルとオクトーのにらみ合いは六時間続いたが、剣術大会運営本部は二人に動くよう促すことも、試合を中断するようなこともしなかった。

なぜなら、帝国剣術大会は長い歴史と伝統を誇る大会で、決勝戦は

時間無制限であり、過去の試合では三日三晩にらみ合っていたこともあったからである。

「オクトーさんは何故先に動かなかったの？ナバル」

「オクトーに直接聞いたわけじゃ無いから、これは俺の推測だが…
…オクトーは自分が最初の一撃で俺をノックアウトするつもりだ…
…と言う事を俺が分かっていることをオクトーも分かっている。先にオクトーが動いたとしても、俺に隙が無いなら返し技を受ける。お互いに相手に隙ができるのを待っていた」

クリプトン卿が、試合の詳しい話に戻った。

決勝戦は時間無制限でノックアウトか、どちらかがギブアップするまで勝負は着かない。

午後七時を過ぎて、屋外にある試合場はすでに暗くなり、かがり火が焚かれていた。

かがり火の灯りに照らされて、ナバルとオクトーのにらみ合いは続いていた。

その時、突然にわか雨が降った。

雨でかがり火が消えて暗くなると同時に、二人は動いた。

かがり火が消えたことに二人とも僅かに動揺し、お互いに隙ができただけであった。

一瞬の間暗くなり、観客にも審判にも二人の動きはハッキリとは見

えなかった。

すぐに、大会運営本部の魔導師が灯りの魔法で二人を照らしたところ、ナバルが頭から血を流して気を失って地面に横たわっており、オクトーは剣を打ち込んだ姿勢のまま立っていた。

当然、審判はオクトーの勝利を宣言した。

しかし、その判定に猛烈な抗議をした人物がいた。

審判から勝利を宣言されたオクトー自身であった。

「ギブアップだ！審判！これを見ろ！」

オクトーは審判に右手の親指を見せた。骨折していた。

「私がナバルの頭に打ち込むよりも先に、ナバルの木刀が私の右手の親指に打ち込まれていた！木刀だったから骨折ですんだが、真剣だったら親指を切り飛ばされて、私はナバルの頭に打ち込む前に剣を取り落としていた。だからナバルの勝ちだ！」

魔導師の治癒魔法で目が覚めたナバルにも、オクトーは同じ事を言った。

「ナバル。お前の勝ちだ！認めてくれ！」

ナバルは首を横に振った。

「確かに、俺が頭に打ち込まれる前にオクトーの右手の親指に打ち込んだが……俺は向き合っている内に自分の持っているのが、木刀

で真剣では無いことを忘れていた。だから親指を切り飛ばすのを狙ったりしたんだ。俺のドジだ。その結果、俺は気を失って倒れて、オクトーは立っていた。明らかにオクトー、お前の勝ちだ！」

ナバルとオクトーはお互いに、相手が勝ったと主張し続けた。

大会運営本部でも、どちらの勝ちか激しい議論になったが、結局審判の判定通りオクトーの勝ちとなった。

「そういう事だったの」

クリプトン卿の話を聞いたメイベルは納得した。

「それで、オクトーさんが行方不明ってのは、どういうことなの？」

クリプトン卿がメイベルの疑問に答えた。

「オクトーは『私は剣の修行の旅に出る。次の大会でハッキリと決着を着けよう！』と言い残して、旅立った。マスコミも取材しようという行方を探したんだが、今だに見つからないし、目撃情報も無い」

ナバルが明るい声を出した。

「大丈夫だ！帝国剣術大会が開催されるんだから、オクトーのヤツも必ず出場のために来る！」

同じ頃、草木が生い茂った山の中を一人の男が歩いていた。

身長・体格はナバルと同じくらいだ。髪の毛と髭は伸び放題で顔を覆っていた。

着ている服は、長い間洗濯してないらしく汚れていた。

その男が長時間歩いていると、眼下に小さな村が見えてきた。

第一章 帝国剣術大会開催決定（後書き）

ご感想をお待ちしております。

第二章 山奥の小さな村 その1

山奥にあるこの小さな村は、村人全員で約百人しかない。

山の熊などの獣を狩ったり、山菜を採ったりすることで生計を立てている。

距離的には帝都サクラスと近いのだが、帝都の住民と村の住民の間に行き来は、ほとんど無かった。

なぜなら険しい山道を歩く以外、この村に行く手段が無かったからである。

しかし、この日からは変わることになる。

帝都と村を結ぶセメントで舗装された自動車道が開通したのである。

「なんだか懐かしい光景ね。世界大戦の時の西大陸での道路工事を思い出すわ」

道路の工事現場で工事車両や作業員を眺めながらつぶやいたのは、ソルティス教の若い女性神官アステル・ラガナンだった。

「そうね。戦争が終わって西大陸から帰ってきて、そんなに経っていないのに、色々なことが懐かしいわ」

アステルに相槌を打ったのは、ソルティス教会の医師の中では実質的な最上位である修道女ティアマリア・ファーマシィだ。

「何といつても一番の思い出は、勇者くんがメイベルにプロポーズしたことね」

こう言ったのは、書記係の正修道女レジーナ・テルルだ。

彼女の正式な名前はもつと長いのだが、彼女は好んで自分をレジーナ・テルルと名乗る。

「うつつうつ、メイベルちゃん……ナバルも僕を差し置いて、メイベルちゃんに抜け駆けしてプロポーズするなんて……」

号泣しているのは、帝都近衛騎兵隊の小隊長の青年クラウド。

クラウドは自分が参加できなかった世界大戦の戦場で、メイベルとナバルの仲がますます深くなったことを聞いてから、ずっとこの調子なのだ。

彼のフルネームも長く、自分から何度も名乗っているのだが、他の人からフルネームで呼ばれたことはない。

「もう。クラウド。いい加減に諦めなさいよ。メイベルと勇者くんが、誰から見ても両思いなのは分かっているでしょ？それよりクラウドは、あたしたち視察団の護衛なんだから、ちゃんと仕事してよね？」

号泣するクラウドに、レジーナは少し呆れて話し掛けた。

帝国議会は交通網の整備を進めている。

帝国内の主要都市を結ぶ遠距離交通網は、鉄道によりほぼ完成したため、主要都市周辺の町や村を結ぶ近距離交通網の整備に取り掛か

っている。

この山道はセメントで舗装した自動車道をつくり、空気エンジン自動車を走らせる方針である。

空気自動車は一般に普及させるために格安で販売されているため、村人の中には早くも購入して運転している人もいる。

レジーナたちは教会から派遣されて、工事の様子を視察に来ていた。

「その男！止まれ！」

号泣していたクラウが、いきなり真剣な表情になり大声を出した。

レジーナがクラウの視線の方向を見ると、村の周りの森の中から一人の男が歩いて出て来た。

その男の髪と髭は伸び放題で顔を覆っており、服は長い間洗濯してないらしく汚れていた。

「猟師さんかしら？いいえ、違うわね」

アステルは、その男を最初は猟師だと思った。長期間山に籠もる猟師は、そのような姿になるからである。

しかし、その男は猟銃は持っておらずに、腰に剣を差していた。

（クラウさんが不審人物あつかいするのも無理ないけど……何者なのかしら？）

アステルが、そう考えていると、その男がいきなり剣を抜いて、アステルたちに向けて走り出した。

「剣士隊！その男を取り押さえろ！」

クラウの命令を受けて、剣士隊十人が剣を構えて、男の周囲を取り囲んだ。

「止まれ！止まらないと、斬るぞ！」

男は剣士隊隊長の警告を無視して、剣を振り下ろした。

男は瞬く間に剣士隊十人の手首を剣で打った。剣士隊全員が剣を取り落として、痛みで手首をおさえていた。

「十人の剣士を瞬く間に戦闘不能にするとは！あの男はかなりの剣の達人のようです！アステルさんたち気をつけて下さい！」

クラウはアステルたちに注意を促した。

「銃器隊構え！止まれ！止まらんと、撃つぞ！」

クラウが部下の銃器隊十人に命令して、男に警告した。

銃器隊が装備している銃は、今では旧式兵器となっている先込め式の単発銃で、あえて威力を低くしてあるため三十メートル先の厚手の服を撃ち抜けない。

自動小銃が開発されているのに、帝都近衛隊が未だに旧式銃を装備しているのには、もちろん理由がある。

帝都近衛隊は「軍隊」ではあるが、実際にやっている仕事は「警察」としてのものがほとんどである。

テロ集団による帝都でのテロ活動や西大陸のドラゴンによる奇襲攻撃を除けば、普段相手にしているのは「敵」ではなく犯罪者である。

サクラス帝国においては、犯罪者でも人権があり、よほどの凶悪犯でもなければ、警察が逮捕するさいに殺してしまったら社会問題になる。

そのため警察は、なるべく容疑者を傷つけずに逮捕しようとする。

南アルテース西南戦争・世界大戦で開発された銃火器は、殺傷能力が強過ぎて一般的な警察業務には使えないのである。

サクラス帝国における警察は、軍隊が機関銃や戦車を装備して大きく変化したのに対して変わっておらず。剣士・魔導師・旧式銃の銃器隊が、相変わらず主力である。

剣や攻撃魔法ならば相手を殺さないように手加減して攻撃できるし、威力を弱めた旧式銃なら相手に怪我をさせても、即死させる可能性は低いからである。

一般人相手ならば旧式銃とはいえ十人から銃口を向けられれば、それだけで怯えて足を止めるのが普通であった。

しかし剣を抜いた男は、自分に向けられた銃口を無視するように、アステルたちに向かって走り続けた。

クラウドとしては銃器隊に発砲させるつもりはなく、男を止めるために銃口を向けさせたのだが、男の行動を見て次の命令を出した。

「三十メートル以内にあの男が来たら、撃て！」

命令すると、同時にクラウドはアステルたちに近づいた。

「皆さん。銃器隊が突破されたら、僕が最後の盾になります。僕があの男と戦っている間に、逃げてください！」

アステルたち三人は自分たちも戦うと言ったが、クラウドは反論した。

「皆さんは戦争に参加したとはいえ、司令部の業務がほとんどでしたでしょう？近接戦闘の経験は少ないはずです。レジーナ。きみの言うとおり僕は護衛なのですから、護衛としての仕事をさせてください」

「クラウド。あなたが、そんなに頼もしいことを言うなんて……」

レジーナは本気で、クラウドの言葉に感激していた。

クラウドは口には出さなかったが、内心では後悔していることがあった。

（アステルさんたちの護衛を命じられた時、この辺りは治安も良いから、僕自身と剣士隊十人・銃器隊十人で護衛は充分だろうと判断してしまいましたが……こんなことになるなら剣士や魔導師をもっと大勢連れて来るのでした）

クラウドは走って来る剣を抜いた男を見た。

（しかし、あの男は何者だろう？山賊ならもつと大勢で襲い掛かってくるだろうし、テロという感じでも無い）

銃器隊が一斉に男に向けて発砲した。

しかし、男の走る速さは変わらなかった。

「全弾ハズレだと？馬鹿な旧式銃の命中率は悪いとはいえ、十人が三十メートルで撃つて、一発も当たらないなんて！」

クラウドは言葉通りに、アステルたちの盾になろうと剣を構えた。

しかし、男はクラウドたちの予想外の行動に出た。

男はクラウドもアステルたちも無視して、クラウドたちの背後の森の中に駆け込んだのである。

クラウドたちが背後を振り向くと、巨大な熊を男が剣の一撃で倒しているところであった。

その光景にクラウドたちが茫然としてみると、男は懷からナイフを取り出して、熊の死体を解体し始めた。

「あの……何をしてるんですか？」

アステルが茫然自失から回復して、男に話し掛けた。

「熊の肉は食べるとうまいし、毛皮は着ると暖かい」

男は、それだけ答えると熊の解体を続けた。

男の着ている服は、よく見ると熊の毛皮から作られた物であった。

男の服には、できたばかりの銃弾の穴が数個開いていた。

「ちょっと！弾が当たっているじゃないの！ティア！治療をお願い！」

アステルに頼まれて、ティアマリアは男の傷の診断をした。

「厚い毛皮を着ていたから、幸い大きな傷にはなっていないけど……かなり痛いはずよ。普通の人間なら痛みで動けないはずだわ」

ティアマリアは男に治癒魔法をかけた。

「治療感謝いたす。私が倒したあの十人の剣士たちにも、治癒魔法をかけてくれ。手加減したから、すぐ治癒魔法をかければ傷も残らんはずだ」

アステルが、ようやく状況を理解して男に話し掛けた。

「あなたは、わたしたちを襲おうとしてた熊を倒してくれたのね。感謝するわ。でも、それなら、そうと言ってくれれば誤解されずに済んだのに……」

「私がいた位置からでは大声で叫んで、警告することになる。熊を刺激することになり、かえって危険だ。私が、この手で熊を倒するのが一番手っ取り早い。ラガナン殿」

「えっ！？何で？わたしの名前を……」

アステルは見覚えのない男が自分の名前を口にしたので驚いた。

「貴女はアステル・ラガナン殿であろう？」

男は、さらにティアマリアに顔を向けた。

「こちらはティアマリア・ファーマシィ殿」

ティアマリアも男とは初対面のはずなので、自分の名前を呼ばれて驚いた。

男はクラウドとレジーナの方も見た。

「そちらがユーベラス公国のアキロキヤバス公王の三男のロード・クラウド・アスピス・リ・フローレス・ド・アキロキヤバス・ユーベラス殿。それに東アルテース公国のテルル公王の孫娘のレジーナ・ラ・ルース・ド・テルル・アイシア・アルテーズ殿」

クラウドとレジーナは友人からも呼ばれたことの滅多にないフルネームを、見覚えのない男が口にしたので驚いた。

「あの……あなたのお名前は？」

アステルが全員の疑問を代表するように、男に質問した。

男は答えた。

「私の名前はオクトー・アグディカニス。西アルテース公国のビー

ズマス公主のお抱え剣士だ」

第二章 山奥の小さな村 その1（後書き）

ご感想をお待ちしております。

第三章 山奥の小さな村 その2

クラウドが驚いた。

「帝国剣術大会の決勝で、ナバルと戦った。あのオクトーさんですか？」

「その通りだ」

オクトー・アグディカニスがうなづいた。

「クラウド殿と私は、剣術大会で対戦したことがあったと思うが？」

「ええ。その通りです。でも、その顔では分かりませんでした」

オクトーは自分の髪も髭も伸び放題の自分の顔を右手で触った。

「これでは分からないのも、無理はないか、ところでナバルは元気なのか？」

「勇者くんなら元気でいるわよ」

オクトーの質問にアステルが答えた。

「勇者？勇者とは誰のことだ？」

アステルたちは驚いた。ナバルがソルティス教の神事のくじびきで救世の勇者に選ばれたことは、サクラス帝国では知らない人間はいないからである。

クラウドが、さっきのオクトーの発言を思い出した。

「オクトーさんは自分のことをビーズマス公王のお抱え剣士と名乗りましたが、ビーズマス卿がどうなったのか知らないんですか？」

「公王陛下が、どうされたのだ？まさか！亡くなられたのか？」

アステルたちは、また驚いた。西アルテース公国の前の公王であったビーズマス卿がアルテース西南戦争の敗北により、逃亡して行方不明になっていることは、帝国で知らない人間はいないからである。

アステルがオクトーの姿を、じつくりと観察した。

髪と髭は伸び放題だし、着ている熊の毛皮の服は、素人が作ったもののらしく雑な作りである。

「オクトーさん。ひょっとして、あなたは長期間山に籠もっていて、人里に下りたことがないんじゃないの？」

「そうだ。ここ数年山に籠もり、剣の修行をしていた。腹が空けば山の獣の肉を食い。服が破ければ獣の皮を剥いだ。こうして人と話すのも数年ぶりだ」

「じゃあ。帝国剣術大会が、ここ数年中止になっていたことも知らないんですね？」

クラウドの質問にオクトーは驚いた。

「数年中止になっていたと？原因は何だ？」

アステルたちは言い淀んだ。それを説明するには、デスペラン騒動・アルテース西南戦争・世界大戦について説明しなくてはならず。恐ろしく長い話になるからである。

アステルは少し考えてから答えた。

「そのことは後から話すわ。長い話になるから、こっちから質問だけどオクトーさんはここ数年の社会の変化についてなにも知らないのね？」

オクトーはうなづいた。

「私は剣術大会決勝の後、ずっと山に籠もり剣の修行をしていた。人と話すのは先程も言ったように数年ぶりだ」

クラウが今度は疑問をぶつけた。

「剣術大会が中止になったことも知らなかったのでしょうか？何故、毎年剣術大会が開催される時期に山から下りなかったのですか？」

「前回のナバルとの戦いは不本意な結果に終わった。自分が納得できるまで剣の腕前を上げるまでは剣術大会に出る気は無かった」

オクトーは自分の腰に差した剣をさすった。

「ようやく自分の納得できるまで剣の腕を上げた。だから、こうして山から下りてきたのだ」

オクトーは改めて真剣な声を出した。

「ところで、私の質問に答えてはくれぬか？ ビーズマス公王陛下はどうされたのだ？ 何故、帝国剣術大会は、ここ数年中止になっていたのだ？」

みんなを代表してアステルが答えた。

「とにかく、夜になるまで待つて。夜になれば、一番分かりやすい説明方法ができるから」

同じ頃、西アルテース公国の首都サンウーヌスのコスモス宮の執務室では、メイベルたちが休憩のためのお茶の時間になっていた。

お茶のテーブルに着いたのは、メイベルとナバルとクリプトン卿、そしてメイベル付きの給仕係でメイベルの親友でもあるパセラ・アヴィシスの四人だった。

パセラが全員のお茶とお菓子を配り終えて、自分の席に座ると口を開いた。

「メイベルう。質問したいことが、あるのですかあ？」

「いいわよ。パセラ。何でも聞いて」

「国債つて、何ですかあ？」

メイベル、ナバル、クリプトン卿の三人は、ずっとこけて椅子から落

ちそうになった。

なぜなら、休憩時間までメイベルたちは国債についての書類の処理をしており、パセラもその手伝いを彼女が開発に関わった電気計算機を使ってしていたからである。

「パセラ。国債が何かも分からずに、電気計算機で金額を計算していたの!？」

メイベルが驚くと、パセラがのんびりと答えた。

「ナバルさんから渡された書類の合計金額を出すように言われて、わたしは電気計算機に計算式と数字を入力していただけでしたからあ」

「もう。パセラ」

メイベルが少し呆れていた。

「パセラさん。国債について俺から説明する」

ナバルが説明を始めた。

国債とは「国庫債権」のことであり、国が発行する債権である。

税金による収入だけでは国の財源が不足する際に行われる「借金」である。

「例えば、メイベルが国で、パセラさんが国民だとする」

ナバルはパセラの前に金貨を一枚置き、メイベルの前に「国債」と書かれた紙を置いた。

「メイベル国政府が発行した『国債』を国民パセラが買った」

ナバルは金貨をメイベルの前に動かし、「国債」と書かれた紙をパセラの前に動かした。

「これでメイベル国政府は金貨を手に入れられるし、国民パセラは『国債』を手に入れられる」

パセラは納得していないようだった。

「はあ……こんな紙切れ一枚手に入れても、何が得するのですかあ？」

ナバルは笑って答えた。

「その紙には『五年後、利子として銀貨五枚を付けて返します』という契約が書いてあるんだ」

「あっ！ホントですう！」

パセラは紙に書かれたナバルの手書きの文字を見た。

「だから、五年後には……」

ナバルはメイベルの前に置かれた金貨一枚の上に銀貨五枚を乗せて、パセラの前に動かした。

「こうして、パセラさんの元に戻ってくるわけだ」

パセラは喜んで笑った。

「銀貨五枚！得しましたあ！確かに得をするのならば、みんな国債を買いますねえ」

そこで、パセラが疑問の表情になった。

「でも、国は国債を買ってくれた人に利子を付けて返さなきゃ、いけないですよ？国が返すお金を持っていなかったら、どうなるんですかあ？」

「いい質問だ。パセラさん。今日、処理している国債の書類が、その問題なんだ。数年前のアルテース西南戦争の時に、前の公王であったビーズマス卿が大量に発行した『戦時国債』の返還期限が今年なんだ」

「戦時国債」とは、戦争の時に不足する戦費を調達するために発行される国債である。

アルテース西南戦争の時に、すでに財政難に陥っていた西アルテース政府は高い利子率の戦時国債を大量に発行した。

アルテース西南戦争の最初の方では、西アルテースが有利だったため、西アルテースのほとんどの国民は投資目的で戦時国債を購入したのだった。

「だが、戦争終盤になると、誰の目にも西アルテースの敗北は明らかになっていった。戦争の最後には、このコスモス宮を十万人の西

アルテース市民が取り囲んだが、軍も警察もビーズマス卿の命令を聞かずに、市民の排除には動かなかった。その理由の一つは軍や警察への給料がともに払えない状況にあったことなんだ」

ここで、パセラは自分が電気計算機で計算して出した数字を思い出した。

パセラは会計の知識は全く持っていないが、数学に関してはメイベル以上の秀才なので、自分が電気計算機で計算して出した金額の桁数がとんでもないことは、すぐに分かった。

「ナバルさん。あんなにたくさんのお金を西アルテース市民のみなさんに返さなきゃならないんですね？西アルテース政府は、そんなにたくさんのお金を持っているんですかあ？」

ナバルは、あっさりと答えた。

「無いよ」

パセラがナバルの答えに啞然としたが、ナバルは説明を続けた。

「ビーズマス卿が公王の時に、無理な出費をした影響がいまだに残っていて、西アルテース政府は酷い財政赤字なんだ」

落ち着いて説明するナバルに対して、パセラは激しく動揺した。

「何で？そんなに落ち着いているんですかあ？ナバルさん！借金を返せなかったら、西アルテースの市民さんたちはとても怒って、ビーズマス卿の時みたいにコスモス宮を取り囲むかもしれませんよお！そうなたらメイベルも逃げ出さなきゃならなくなります！」

「パセラさん。落ち着いて。西アルテース政府に金は無いが、金を返す方法は有る」

「その方法って、何ですかあ？」

「簡単に言えば過去の借金を返すために、今、新しい借金をするんだ」

ナバルは具体的な方法を説明した。

今年これから、西アルテース政府は新しい国債を発行する予定がある。

今年の国債の売却で得た金を、戦時国債の返還に当てることになっている。

パセラは疑問の顔になった。

「でも、今年の国債は誰が？買ってくれるんですかあ？西アルテースの市民さんたちは買ったりしませんよね？」

「買うのは、南アルテース連邦共和国政府だ。メイベルが大統領として連邦議会に提案して、承認される予定だ」

パセラは戸惑った後、少し笑った。

「何だか、それは裏技みたいで少しズルいですう。メイベル女王の借金をメイベル大統領が肩代わりするようなものですう。それに新しく出来た借金は、どうするんですかあ？」

「メイベルが西アルテースで起こした新興事業はうまく行っているから、数年後には税率を上げずに税収が上がる見込みだ。そうすれば借金は全額返せるから、財政赤字は解消される。今回の国債の発行は、それまでの一時的処置なんだ」

メイベルはナバルとパセラの会話を聞きながら、ずっと気になっていたことを思っていた。

（ナバルは今年の帝国剣術大会に出場する予定でいるけど、財政に関わる仕事が忙し過ぎて、剣の練習の時間がほとんど取れないでいるわ。財政のことは気にせずに剣術大会に専念するように言っべきかしら？）

メイベルは「メイベル個人」としては、ナバルには剣術大会で活躍して欲しいのだった。

（でも……財政のことを任せられる人は、ナバルの他にはいないし……）

メイベルは「女王」「大統領」としては、剣士としてのナバルより、会計士としてのナバルを求めるのであった。

メイベルは公的な立場と私的な立場に挟まれて、ナバルに何も言いだせないでいた。

夜になった。

山奥の小さな村では、野外に映画用のスクリーンが張られ映写機が用意されていた。

夜の闇を利用して、道路工事の作業員や村人へのレクリエーションとして、屋外での映画上映会が元々予定されていた。

映画のタイトルは「聖女さまと勇者さま」。

メイベルとナバルの活躍を題材にした映画であった。

第三章 山奥の小さな村 その2（後書き）

ご感想をお待ちしています。

第四章 山奥の小さな村 その3

映画「聖女さまと勇者さま」を見ている間、オクトーは少しも動かず。一言も発しなかった。

映画の内容は、デスペラン騒動・アルテース西南戦争・世界大戦におけるメイベルとナバルの活躍を映像化している。

以前はモノクロの無声映画しかなかったが、この映画は音がついており、世界初のフルカラー映画である。

メイベルとナバルを映画の中で演じているのはもちろん俳優であるが、戦闘シーンは軍隊の協力により本物の戦車や機関銃を使用して撮影されている。

マウンテン・ドラゴンが出てくる場面では、もちろん本物のマウンテン・ドラゴンが出演している。

そうして制作された映像は、本物の戦場を撮影したかのようにリアルであり、映画を観る観客には実際に戦場にいるかのような臨場感があるので、サクラス帝国全土で大人気を得ている。

映画のラストシーンは、ナバルがメイベルにプロポーズするが、それに伴う神儀のくじびきでナバルが「一年後に神儀のやり直し」のハズレくじを引いてしまい。二人の関係は一年間お預けになってしまった。

メイベルが「くじびきなんて大嫌い！！」と絶叫するのが、コメディタッチで描かれて終わりである。

映画が終わった後も、しばらくの間オクトーは全く動かず声も発しなかった。

（やっぱり。ショックだったのかしら？）

アステルはオクトーの様子を見ながら思った。

（無理もないわ。ここ数年の社会の急激な変化は、実際に体験したわたしでも戸惑うことがあるもの。ずっと山に籠もっていて、社会の変化を知らなかったオクトーさんには精神的にショックでしょうね）

アステルはオクトーの表情から内心を読み取ろうとしたが、伸び放題の髪と髭で顔が覆われているのでできなかった。

「ラガナン殿」

オクトーがアステルに顔を向けて口を開いた。

「何かしら？オクトーさん」

「ターロ・ウラシーマのおとぎ話を知っているか？」

「もちろん。知ってるわ」

ターロ・ウラシーマの話は、サクラス帝国で有名なおとぎ話の一つである。

ほとんどの人間は子どもの頃に、絵本で読んだり、親から聞かされ

たりしている。

話の内容は、山奥の村に住む猟師の若い男ターロ・ウラシーマが子どもたちにいじめられていた小さなドラゴンを助ける。

数日後に、ターロの家に助けたドラゴンが訪ねて来て「お礼に僕のご主人様のお屋敷に、ご招待します！」と言うのだ。

ドラゴンに案内されて、ターロが山奥に向かうと、山奥に立派な屋敷があった。

ターロが屋敷の中に入ると、屋敷の主人は絶世の美女で、ご馳走や美酒をふるまわれて、ターロは楽しく一夜を過ごす。

朝になると、ターロは屋敷を出て自分の村へ帰った。

ところが村に着くと、村にある建物も住んでいる村人も、ターロにとって見知らぬものになっていた。

ターロにとって屋敷で過ごしたのは一晩のことだったが、その間に村では百年以上の時間が過ぎていたのだった。

「私はまさしく、そのターロ・ウラシーマだ」

オクトーは自分自身を嘲る皮肉な笑い声をあげた。

「私が山に籠もり必死で修行している間に、剣術は戦場で役立たずになっていた。私の修行は全て無駄だったわけだ」

オクトーは絶望するような声だった。

アステルは慰めるため、それを否定する言葉をかけたかったが、戦場での実戦経験がある彼女はオクトーの言葉が正しいと分かっていた。

「映画とやらに出てきた機関銃という武器は、全く訓練をしたことの無い素人でも引き金を引くだけで連続して弾を発射することができる。長年剣の修行をした私が機関銃を持った素人には勝てないのだ！」

（理解が速いわね）

アステルは思った。

専門の軍人でも戦場に機関銃が登場した時、それが戦場を以前のモノと変えてしまうことに気づかなかった人間は多いのだ。

「この状況では、剣術は廃れてしまっているのだろう。剣術大会も開催されなくなるわけだ」

落ち込んだ様子のオクトーにアステルが、首を横に振りながら声をかけた。

「いいえ。オクトーさん。剣術大会は廃止されてなんかいないわ。むしろスポーツとして、ますます盛んになっているの」

アステルはオクトーを元気づけようとして、そう言ったのだが逆効果だった。

「スポーツか……かつては戦場の勝敗を決する兵法と言われた剣術

も、サッカーやベースボールのような玉遊びと同じ物に成り果てたか……」

ますます落ち込んでいるオクトーにアステルは、とにかく剣術から話題を逸らすことにした。

「ところでオクトーさんは、わたしの名前知っているわよね？わたしはオクトーさんとは初対面のはずなんだけど、何故知っているの？」

レジーナも話に加わった。

「あたしも、それは気になっているのよね。あたしもオクトーさんとは初対面のはずなのに、あたしのフルネームを知っているなんて……」

ティアマリアも不思議そうな顔をしていた。

「わたしも初対面のはずよ」

それに対して、オクトーは不思議そうな声で答えた。

「何を言っておるのだ？三人とも以前一度会ったことが、あるではないか」

「いつ？どこでなの？」

代表してアステルが質問した。

「帝国剣術大会でだ。ラガナン殿は決勝トーナメントの組み合わせ

を決める神儀のくじびきの時に立ち会った神官の一人であっただろう？」

アステルは思い出した。

「確かに、あの時わたしいたけど……あの時は神官は十人以上いたのよ。わたしのことだけ覚えてるなんて……」

アステルは少し気持ち悪く思った。

「ラガナン殿。何か誤解しているようだが、私はあの時いた神官は全員覚えてるぞ。正確には神官は十二人で名前は……」

オクトーはアステルも忘れていた神官全員の名前を正確に口に出した。

「すごい記憶力ね」

アステルが驚いていると、オクトーはティアマリアとレジーナに顔を向けた。

ティアマリアは帝国剣術大会の時に医療係の一人としており、オクトーはその時の医療係全員の名前を口に出した。

レジーナは観客席の貴賓席に祖父のテルル公王と一緒に観戦しており、オクトーはその時に貴賓席にいた全員の名前を口にした。

「オクトーさんは何故そもそも名前を知っているの？」

アステルの疑問にオクトーが答えた。

「剣術大会のパンフレットに書いてあった」

「覚えるほど、何度も読んだの？」

「いや。一度読んだだけだ」

「一度読んだだけで覚えているなんて、オクトーさんの記憶力はすごいわね」

アステルが驚いていると、オクトーは心底不思議そうな声を出した。

「人間が一度見た物を忘れるということがあるのか？」

同じ頃、西アルテース公国首都サンウーヌスのコスモス宮では、ナバルとメイベルが就寝時となり寝室に入っていた。

ナバルとメイベルの寝室は、もちろん別である。

ナバルとメイベルは周囲から「恋人同士」「婚約者同士」と見られているが、社会の一般常識として結婚前の男女が同じ部屋で寝るというのは、かなり不道德なことなので、そうなっている。

ましてや、ナバルとメイベルはソルティス教会から勇者・聖女に認定されているため、道徳的に振るまうように求められているからでもある。

ナバルは自分の寝室の中で木刀を振っていた。

一旦はベッドの中に入ったのだが、眠れなかったのだ。

ナバルとメイベルの寝室は隣同士で壁のドア一枚で通じている。

コスモス宮の使用人に見られることなく、お互いの寝室を行き来することはできるのだ。

執事長が気を回して、そうしたのだが、二人は気づかいに気づいておらず。そのドアを使ったことは一度もなかった。

そのドアが今、初めて開いた。

メイベルがドアを開けて、ナバルの寝室に入って来たのだ。

「剣の練習していたのね。今、ちょっとお話して良いかしら？ ナバル」

ナバルがうなずくと、二人はベッドに並んで座った。

二人とも着ているのは、寝巻きである。

メイベルは自分から話しかけてきたにもかかわらず。言いにくそうで、なかなか口を開かなかった。

ナバルは長い付き合いなので、こういう場合は待った方が良いと分かっていたのでメイベルに話を促すようなことはしなかった。

ナバルは寝巻き姿のメイベルを見ると、自分の心の中にモヤモ

ヤしたものがわいてくるのを感じた。

朴念仁と言われているナバルではあるが、男としての欲望は人並みにあるのだ。

（メイベルの寝巻きのデザイン大胆だな。手足はむき出しだし、胸元は大きく開いているじゃないか）

普段メイベルが着ている聖女服は、それらを全て隠すデザインになっている。

ナバルの視線は、メイベルの胸元からチラリと見える大きくはないが形の良い胸に釘付けになっていた。

（あれ……？）

ナバルは気づいた。

「メイベル。ひょっとして、下着を着てないんじゃない？」

「うん。そうよ」

メイベルはあっさりと答えた。

「なんで、そんなことを……」

ナバルは動揺していたが、メイベルは平然としていた。

「この寝巻きは、この前パセラと一緒に買い物に行った時に買ったお揃いなの。この寝巻きを着る時は下着を着ないのが、流行なんで

すって！」

（なんて無防備な……ひょっとして、メイベルは俺のことを誘っているのか？ いや、駄目だ！ 結婚前の男女が、そういうことをするのは！）

そんなナバルの内心の葛藤を知ってか知らずか、メイベルはナバルの手に自分の手を合わせて、ナバルの瞳を見つめた。

「ねえ……ナバル。自分の気持ちに正直になつて」

（メイベルが、ここまで積極的になつたんだ。男の俺がリードすべきだろう！）

「分かった。メイベル。俺は自分の気持ちに正直になる！」

ナバルはメイベルを抱きしめようとした。

「それは良かったわ」

メイベルは立ち上がってナバルから離れて、壁に立てかけてある木刀をナバルに渡した。

「思う存分に、剣の練習をして！ 帝国剣術大会に優勝するのが、ナバルの願いなんてしょ！ 財政の仕事は、わたしも頑張つてナバルが剣の練習時間を増やせるようにするから！」

（メイベルが俺に正直になれて、そういう意味だったのか……）

「それじゃあ。お休みなさい。ナバル」

メイベルは自分の寝室に戻って行った。

閉じられたドアには、鍵は掛かっていないのだが、ナバルは追い掛ける気にはなれなかった。

ナバルは悶々とした気持ちを解消しようと、一晩中剣を振ることになった。

第四章 山奥の小さな村 その3（後書き）

ご感想をお待ちしております。

第五章 帝都サクラスにて その1

帝国剣術大会開催まで、あと数日となった。

ナバルとメイベルは今、帝都サクラスにいる。

滞在しているのは、西アルテース公国が所有している広大な屋敷だ。

この屋敷は西アルテース公国の歴代の公王が、帝都サクラスに滞在する時に使っていた屋敷で、現在の西アルテース公国の女王であるメイベルが引き継いでいる。

広大な庭では、朝早くからナバルが部下と剣術の練習をしていた。

ナバルの西アルテース公国における現在の役職は、近衛大隊長兼財政顧問である。

メイベルが隊長である近衛大隊の主な任務は、メイベルの護衛だ。

そのため普段は銃火器は配備されてはおらず。剣術が重視されている。

なぜなら、自動小銃や火炎放射器のような新兵器が開発された時に、それが剣や魔法のように特別な訓練をせずとも、たとえ子供であっても引き金を引くだけで大きな攻撃力があることは分かった。

それだけに新兵器が一般社会に流失して、犯罪に使われることをサクラス帝国の治安担当者は恐れた。

そのために新兵器の製造・管理に関しては法律により厳しい基準が設けられ、軍隊以外では保有・使用は禁止されている。

ナバルが指揮している近衛大隊も軍隊ではあるが、メイベルの護衛が任務のため、重火器で武装しては一般市民に脅威をあたえてしまうため、普段の武装は腰に差した剣のみである。

サクラス帝国の治安は現在は良好であり、その剣を実戦で抜いたことは世界大戦の終戦後、今のところ一度も無い。

かつては、帝都サクラスの周りに野盗が出るほど治安が悪い時期もあり、世界大戦の初期には西のフォレスト・ドラゴンの帝都奇襲により当時の大司教が死亡した時には、それに伴って起こった混乱により帝都周辺の治安は一時的に著しく悪化した。

大量に発生した野盗により、帝都周辺が好き放題に荒らし回られるような事態まで発生したのである。

そのため大司教直属の組織である帝都近衛隊の隊長は、メイベルを通じて南アルテース軍から放水戦車などの新兵器を大量に譲り受け、野盗討伐に投入した。

その結果、瞬く間に野盗は壊滅したのであった。

クラウは、帝都近衛隊が西大陸への遠征への不参加を決定したことを悔しがっていたが、帝都近衛隊の隊長は、国内の治安維持という任務を重視したのであった

ナバルが部下とやっている剣術の練習は、ナバルが部下に稽古をつけてやるという意味も、もちろんあるが、ナバル自身の帝国剣術大

会に向けての練習も兼ねている。

練習場の側では、メイベルがナバルの練習を見学している………ということは無い。

メイベルは屋敷の奥の執務室で、不機嫌な顔をして、山のように積まれた大量の書類と格闘していた。

「あーっ！もうっ！何で！？わたしが処理しなきゃならない書類が、いつもの何倍も増えているのよ！」

「それは、いつもはナバルさんが処理している分まで、メイベルが処理しているから、ですう」

パセラがメイベルに冷静にツツコミをした。

「何で！？ナバルの分の書類まで、わたしが処理しなきゃ、ならないのよ！？」

「そうする事を、メイベルが自分で決めたんですう」

また、パセラが冷静にツツコミをした。

「それは、そうだけど………こんなに大変だなんて、思わなかったんだもの！」

メイベルがナバルの分の書類まで、自分で処理しているのは、もちろん理由がある。

ナバルは普段は、財政顧問としての書類仕事が忙しいため、剣術の

ための練習時間がほとんど取れないでいた。

それを見兼ねたメイベルが、帝国剣術大会が終わるまで、ナバルの仕事を自分が引き受ける事を申し出たのであった。

「それに普段は書類仕事をしている時には、ナバルと一緒にいられるのに、これじゃあ、離ればなれじゃない！せめて、ナバルが練習をしている側で仕事をさせてよ！」

「ダメですう。クリプトン卿がおっしゃっていたように、機密書類もあるんですから。庭に書類を出すわけにはいきませんですう」

パセラの冷静な対応に、メイベルは少し声を荒げた。

「戦争で西大陸に遠征した時には、砂浜で書類仕事をしていたじゃない！」

「あの時は、戦争中だったからですう」

メイベルのセリフだけを聞いていると、書類仕事をサボって文句だけを言っているように聞こえるが、メイベルはパセラと会話しながら書類に目を通して、テキパキと処理していた。

メイベルは愚痴をパセラに向けてしゃべり続けているが、それはストレス解消のためである。

書類の処理を滞らせてしまえば、結局ナバルに負担がかかるため、メイベルは真面目に仕事をしていた。

パセラは、それが分かっているからメイベルの愚痴の相手をしてい

る。

お昼近くになった。

山のように積み上げられた書類も、だいぶ少なくなった。

メイベルは疲労困憊して、机に突っ伏していた。

執務室のドアの前に、近づいて来る足音がした。

メイベルには、その足音がナバルだとすぐに分かった。
足音が一人分だけだったからである。

なぜなら、執務室には機密書類が置かれているため警備は厳重であり、ごく少数の例外を除いて例えメイベルが執務室に呼んだ人間であつても、警備兵が同行しなければ、執務室のドアの前まで来ることもできないからである。

その数少ない例外がナバルである。

ドアが開く前に、メイベルは突っ伏していた机から体を起こして、疲労困憊の顔を笑顔に変えた。

「メイベル。仕事は進んでいるか？」

ナバルがドアを開けて、部屋に入ってきた。

「もちろん。見ての通り、順調よ」

メイベルは疲労をみじんも顔に出さずに、笑顔で答えた。

昼食は、メイベルとナバルは一緒に食べる約束をしていた。

「ナバルの方は剣の練習の調子は、どうなの？」

「第一中隊の隊員には、まだまだ俺が稽古をつけてやらなければ、ならないヤツがいる。第二中隊には剣の振り方に妙な癖があるヤツがいるから、まずそれを……」

ナバルが自分の部下たちのことを話すのを、メイベルは遮った。

「そうじゃなくて、ナバル自身の剣の調子よ」

「ああ。それならいつもと変わらないぞ」

ナバルはのんきに答えた。

「ねえ。ナバル。自分のための特訓でもしたら？オクトーさんは凄い修行をしてきたみたいよ」

メイベルは部屋に置いてある数紙の新聞と数冊の雑誌を指差した。

どの雑誌の表紙も新聞の一面の記事も、今世間で一番注目を集めている帝国剣術大会である。

特に数年間行方不明だった前大会の優勝者、オクトー・アグディカ

二スが帝都サクラスにあらわれたことが、話題をさらっていた。

オクトーはマスコミの前には、まったく姿を見せようとせず。インタビューにも応じないために、それがますます世間の想像力を刺激している。

「ソロリエンス新聞では『オクトーは、山籠りの修行中にマウンテン・ドラゴンを剣で倒した』なんて書いてあるわ。もちろん。これは、いつものように捏造記事だけど……」

マウンテン・ドラゴンは一体で兵士一万分分の攻撃力があるとも謂われ、口から岩をも溶かす灼熱の炎を吐く、いかに剣の達人であっても一人の人間が倒すことは不可能である。

「でも、この写真は本物みたいね」

メイベルは、新聞に載っている写真を指差した。

明らかに隠し撮りされたもので、伸び放題の髪やヒゲ顔が覆われた男が写っていた。

「ふーん。オクトーのヤツは、今はこんな顔なのか、前の大会の時は髪もヒゲも伸ばしていなかったけどな」

ナバルが、さほど関心の無い口調で言うのを、メイベルは不思議に思った。

「ナバル。オクトーさんはライバルなんでしょう？ もっと強い関心を持っていると、思っていたんだけど……」

ナバルは、落ち着いた態度で答えた。

「もちろん。俺はオクトーを試合で倒したいと思っている。だが、それは自分の剣の腕がどれほど上がったのか確かめたいからだ。オクトー自身には、さほど興味は無い」

「でも、剣術大会で戦う相手の事を調べるのは、当然のだって書いてあるし……」

「メイベル。それは雑誌に載っていた言葉か？」

ナバルが真剣な表示になった。

「ええ。剣術大会の特集記事に書いてあったわ」

「そりゃ。スポーツになった今の剣術大会では、そうだろう。メイベルがいろいろな新兵器を発明したおかげで、戦場では剣術は役立たずになったからな」

ナバルは腰に差した剣を触りながら、嫌な過去を思い出す表情になった。

その表情を見たメイベルは慌てた。

「ナバル。わたしは、そんなつもりで新兵器を発明したわけじゃ……」

ナバルはメイベルに、安心できるように穏やかな表情を向けた。

「メイベル。安心してくれ。メイベルが新兵器を発明した事に文句

を言っているわけじゃない。むしろ感謝している。もし、メイベルが新兵器を発明せずに、西のドラゴンと戦争をしたら、帝国は滅ぼされていたろうからな。人間の剣術はドラゴンに対しては無効だ」

メイベルはナバルの言葉を聞きながら、ナバルが子供の頃から打ち込んできた剣術を自分が結果的に時代遅れにしてしまった事が精神的にショックだった。

「話を戻すが、今のようにならなくなる以前の剣術大会では、相手の事を事前に調べないものだった。なぜなら、戦場では斬り合う相手の事を事前に調べるなんてのは不可能だからだ」

ここでナバルは一呼吸置いて、話を続けた。

「だから、お互いに剣を向け合った瞬間に、相手の腕前を見極めなければならぬ。俺はそれができるし、オクトーのヤツもそうだ」

そう言っ、ナバルはメイベルを優しく抱き締めた。

「安心しろ。メイベル。俺は勝つよ。昔の俺は何の目的も無く、剣を振っていたけど、今はしっかりと目的がある」

「目的って、何なの？」

「もちろん。メイベルと一緒に生きていくことだ」

パセラが二人の昼食を執務室に運んできたが、抱き合う二人の様子を見て、音を立てないように昼食をテーブルに置いて、静かにドアを閉めて執務室から出て行った。

同時刻、オクトー・アグデイカニスは昼食を食べていた。

場所は、宮廷に隣接する近衛隊の詰所の食堂である。

クラウの手配で、オクトーは近衛隊の詰所に寝泊まりしているのであった。

第五章 帝都サクラスにて その1（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第六章 帝都サクラスにて その2

近衛隊の詰所の食堂で、黙々と食事をしているオクトーを近衛兵たちが、羨ましがっている視線で見ていた。

「クラウ殿」

「何ですか？オクトーさん」

テーブルに向かい合って食事をしているクラウに、オクトーが声をかけた。

「他の者たちが私に向けている視線の意味するところは、何なのだろうか？」

クラウはため息を吐いて、食堂の隣にある厨房の方を見た。

「あの光景を見れば、みんなが羨ましい視線で見るのは、当然ですよっ？」

厨房には三人の若い女性がいた。

アステル、レジーナ、ティアマリアの三人である。

「あの三人はこここのところ毎日朝昼晩の三度の食事ごとにわざわざここに来て、食事を作っているのですよ。羨ましい視線を向けられるのは当然ですよ」

「何故？私だけが羨ましい視線を向けられなければならないのだ？」

他の者も全員同じ物を食べているではないか？」

テーブルの席に座っている近衛兵たちの前にあるトレイには、オクトーが食べているのと全く同じ料理が並べられている。

アステルたちは詰所にいる近衛兵全員分の食事を作っているのだ。

クラウドは呆れた。

「アステルさんたちは近衛隊の詰所に来て、食事を作ってくれるなんてことは以前は無かったんですよ。オクトーさんがここに寝泊まりするようになってから、そうするようになったんです。オクトーさんのために食事を作ってくれているのに決まっているじゃないですか！」

「私のために、アステル殿たちが食事を作ってくれているのが、何故？羨ましい視線で見られることになるのだ？」

クラウドはますます呆れた。

「あの三人は性格に色々と問題があるので、恋人がいないのですが……三人とも間違いなく美女です。美女に食事を作ってもらえるなんて、羨ましがられるに決まっているじゃないですか！」

「なるほど」

オクトーは納得した。

「しかし、羨ましい視線を私に向ける必要は無いぞ」

「何故ですか？」

「一般常識としては、女性が男性のために料理を作るというのは、その男性に好意を持っているからであろっ？ クラウ殿と近衛兵たちは、そう思っているのであろっ？」

「ええ、その通りです」

「しかし私の場合は、そうでは無い」

オクトーの声には自嘲の響きがあった。

「アステル殿たちが食事を作ってくれるのは、私に好意を持っているからでは無い。拾った野良犬に餌を与えているような気持ちなのであろっ」

クラウは少し怒った表情になった。

「オクトーさん！その言葉は、あの三人を侮辱していますし、オクトーさん自身も侮辱していますよ！レジーナちゃんたちは人を野良犬扱いするようなことはしません！」

オクトーはクラウに向けて頭を下げた。

「アステル殿たちに対する侮辱に聞こえたのなら、それは謝罪しよう。しかし私自身が飼い主に捨てられて、道端で途方に暮れている野良犬の気分だったのだ」

オクトーは食事をしていた手を休めた。

「あの山奥の村で映画を見せられて、世の中に大きな変化が起こったことを知らされた。私の主君であったビースマス卿は行方不明となり、数年間山に籠もって修行していた剣術は無価値になった。これから私はどうしたら良いのか分からなくなっていた。その私に生きる目標を与えてくれたアステル殿たちには感謝している」

「言っておきますけど、わたしは野良犬を拾ったなんて思っていないわ。オクトーさん」

オクトーの背後にいつの間にかアステルが立っていた。

「野良犬と言うより、森の熊さんよ。その外見は！」

オクトーは相変わらず髪と髭は伸び放題であり、熊の毛皮の服を着ている。

「髪を切って、髭を剃って、服を着替えたらどうなの？」

「風呂には帝都に来てから毎日入っているし、服も洗濯しているから、不潔では無い。きちんと清潔にしている。アステル殿」

「不潔だとか、そういう事を言ってるんじゃないの！山籠りをしていた時には、その格好でも良いでしょうけど、都会では都会での格好というものが、あるでしょう？」

「数年間、私はずっとこの格好でいたのだ。急に変わると、体の感覚が微妙に狂う。剣術の試合では微妙な違いで勝負が決まる」

「そう。それなら、やっぱり帝国剣術大会には出るのね？」

「やはり、ナバルとの決着はつけねばならないからな」

オクトーとアステルが会話していると、レジーナとティアマリアも近づいて来た。

「アステル先生。駄目ですよ。オクトーさんを独り占めにしちゃ」

「そうですよ。オクトーさんは、わたしたち三人の共有財産なんですからね」

アステルたちはオクトーと同じテーブルの席に座ると、食事を取り始めた。

「オクトーさん。三年前の七月の天体観測についての記録のファイルは、どこにあるのかしら？」

「アステル殿。それは十三年前七月の棚に間違えて、入れられている」

「四年前の郵便の記録ファイルは？」

「レジーナ殿。二年前の電信記録のファイルと混同されている」

「五年前の診療記録は？」

「ティアマリア殿。宮廷図書館の地下蔵書庫の方に一般閲覧禁止の医学書と一緒にっている」

世界大戦の開戦時に西のドラゴンによって行われた帝都サクラス奇

襲は、当時の大司教サンクトウス八世を初めとして大勢の死者を出している。

重要な建物の被害としては、聖サクラス教会の大聖堂が爆発し倒壊した。

大聖堂の西隣にある帝国議会議事堂も一部崩壊し、東隣にある公文書館は壁が崩れて中が丸見えになった。

今、アステルたちがオクトーと話しているのは、公文書館に保管されていた書類に関することだ。

公文書館の壁が崩れたため、保管されていた書類は一時別の場所に保管されることになった。

しかし、奇襲に伴う混乱により書類の移動記録が録られなかったため、どこに保管したのか分からず。行方不明になった書類が大量に発生した。

行方不明の書類の搜索は、今も続いている。

書類の搜索にアステルたちは、オクトーに協力してもらったことになったのである。

アステルがオクトーに対して試験したところ、オクトーが驚異的な記憶力を持っていることが分かった。

それでソルティス教会に古くから伝わる記憶術と速読術を、オクトーに習得するように勧めた。

記憶術と速読術がソルティス教会に古くから伝わっているのは理由がある。

ソルティス教の聖典は、今では印刷物になっており誰でも購読できる。

しかし印刷技術が発達する以前には、手で書いて書き写すしかなかったため聖典は貴重品であり、地方の村では村の教会にある一冊の聖典が、その村の唯一の聖典であることが当たり前であった。

ソルティス教にとって重要な儀式であるくじびきを行うための数値表も聖典に載っている。

聖典が貴重品であるため、外に持ち歩くことはできないため、ソルティス教の聖職者が外出した時に信者からくじびきの神儀を頼まれば、記憶だけを頼りに行わなければならない。

そのため記憶術と速読術が聖典を丸暗記するために、ソルティス教会において発達した。

現在では聖職者が聖典を持ち歩くようになっていて、くじびきの神儀を行うための数値表が聖典の後ろに付表としてあるが、「付表を見ずに行つてこそ、真の神儀である！」と考える者も多いため記憶術は今でも盛んである。

「でも、わたしはくじびきの神儀の時にはいつも聖典の付表を見ているんだけどね」

アステルが悪戯っぽく笑つて言うのに対して、オクトーが反応した。

「記憶力を試される試験を受けるのでも無い限り、情報は全て覚えておく必要は無く、どこに情報が有るのかを覚えておけば良いとアステル殿は言っていたな。それなら何故、私には丸暗記させたのだ？」

「オクトーさんの記憶力がどれくらいのものなのか確認してみたかったのよ。まさか一字一句違わずに、読んだ書類全部覚えられるなんて凄いわ！」

「私は、その能力を使って書類の搜索に協力している。人の役に立てるといのは嬉しいものだ」

オクトーの声には心底から喜んでいる感じがした。

（良かったわ。オクトーさんが立ち直ったみたいで）

アステルは思った。

（勇者くんも自分が剣以外に能が無くて落ち込んでいた時、会計という新たな才能を見つけて立ち直ったらしいから……）

「レジーナ殿。これは書類の搜索とは関係の無いことなのだが、言っておかねばならぬことがある」

オクトーがレジーナに顔を向けた。

「西大陸に送っている外交文書の宛名なのだが……あれはマズい」

「何！？何が？マズいの？」

レジーナは戸惑った。

「宛名が『西大陸臨時政府代表』となっているのがだ」

西大陸にあったドラゴン皇帝による帝国は崩壊し、現在西大陸を統治しているのは臨時政府である。

「そのどころが、マズいの？」

「西大陸の言葉に翻訳している言葉が『日が沈む方角にある大陸の仮初めの代表者』なのだ。こちらがサクラス帝国皇帝からの文書にだから相手を格下に扱っている意味合いになる」

「そんな意味に翻訳されているなんて知らなかったわ。でも西大陸から、そのことで抗議されたことは無いわよ？」

「向こうは、戦争に負けたのだから格下に扱われても仕方がないと思っっているらしいことが、向こうからの外交文書から読み取れる。しかし、サクラス帝国が対等の関係を築くつもりならば、マズいのではないか？」

「確かに、マズいわね。宛名を変えるように帝国議会に進言しなきゃ！」

アステルはオクトーの言葉に素直に驚いた。

（オクトーさんは単に文書を丸暗記するだけでなく、そこから得られる知識も確実に自分の物にしているわ）

昼食後、アステルたちはそれぞれの仕事場に戻って行った。

オクトーは自室に戻ると、部屋に山のように積み上げられた書類の束を読み始めた。

読みながら書類の内容の要約をメモしている。

「オクトーさん。剣術大会出場者の名簿が届きましたよ」

クラウドが部屋に入って来て、オクトーに名簿を渡した。

オクトーは右目で書類を読みながら、左目で名簿を見た。

「やはり、クラウド殿も出場するのかな？」

「はい。ナバルには子供の時に剣術大会で僕はボロ負けしていますし、メイベルちゃんは取られちゃうし……僕もナバルとは決着をつけたいんです！」

「色々と因縁があるものだな」

オクトーが出場者名簿に目を通していき、一つの名前に目を止めた。

「ブルーノ・アサツシニオ……書類で読んだが、彼もナバルに因縁のある一人だな」

同じ頃、ブルーノ・アサツシニオは帝都サクラスのホテルの一室で、

妻のエミリー・アサッシニオと会話していた。

第六章 帝都サクラスにて その2（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

第七章 帝都サクラスにて その3

「やはり、わたしが帝国剣術大会に出場するのは反対ですか？ エミ
ー？」

ブルーノは、宿泊しているホテルの部屋でエミーと向かい合っていた。

エミーは厳しい表情をブルーノに向けた。

「アサツシニオ党の副党首のあたしとしては、ハッキリと反対するわ」

ブルーノとエミーは南アルテース連邦共和国の連邦議会議員である。

政党アサツシニオ党の党首がブルーノであり、副党首がエミーなのだ。

「ブルーノ。あなたは、かつてこの帝都サクラスでテロ活動をしていた前歴があるわ。それに勇者ナバルと当時は従者だった聖女メイベルの救世の旅を妨害したという前歴もあるのよ。その意味するところは、分かっているわよね？」

いったんエミーは言葉を切って、ブルーノの返事を待った。

「分かっていますよ。エミー。政治家としての今のわたしには、その前歴はマイナスにしかありません。それどころか政治生命を失いかねません」

エミーはブルーノの言葉を受けて、うなづいた。

「その通りよ。普通なら、あたしたちアッサシニオ党を追い落とそうとする他の政党は、その点を騒ぎ立てるだけで簡単に、ブルーノ。あなたを失脚させることができるわ」

エミーはますます表情を厳しくして、ブルーノに質問した。

「そうなっていない理由は、分かるわね？」

「アルテース西南戦争では、わたしは聖女メイベル直属の部隊の隊長として戦い。プライベートでも、わたしとエミーが聖女メイベルと勇者ナバルと親しいところを見せているからでしょう？」

「その通りよ。それなのに剣術大会に出場して、勇者ナバルと戦おうとするなんて、あたしたちに対立する政治勢力に格好の攻撃材料を与えるようなものなのよ？」

「それは十分に承知しています。ですが……」

エミーは手を挙げて、ブルーノの続けようとした言葉を阻んだ。

「それは何度も聞いたわ。勇者ナバルと剣士として一对一の勝負をしたいんでしょ？まるで子供のケンカね。あなたはもっと計算のできる人なのだと思うただけど……」

「エミー。わたしを軽蔑しますか？」

エミーは、蔑むような視線をブルーノに向けた。

「政治家のエミー・アサツシニオとしては、軽蔑するわ」

エミーは一転して穏やかな笑みをブルーノに向けた。

「でも、ブルーノ・アサツシニオの妻のエミーとしては、あなたが何をしようと付いていくつもりよ」

そしてエミーは座っているブルーノの膝の上に乗ると、ブルーノの頭を抱き抱えて自分の胸に押しつけた。

「もうっ！可愛いじゃない！ブルーノったらっ！そんな腕白な男の子みたいな一面もあるなんて！ますます好きになっちゃっわよ！」

ブルーノはエミーの腰を抱き返した。

「それは、あばたも笑窪というヤツでは、ないですか？」

ブルーノとエミーをお互いを見つめ合って、微笑み合った。

ブルーノとエミーは二人とも、二十歳代後半である。

しかし、ブルーノが長身で二十歳代相応の容姿をしているのに対して、エミーは小柄で十歳代前半に見える容姿をしているので、夫婦が抱き合っているというより、年の離れた兄妹のように見える。

エミーは、自分の子供のように見える容姿を気にしている。

対立する政治勢力の議員から、エミーは「幼女議員」と面と向かって言われたこともあるし、ブルーノは「ロリコン議員」と言われたこともある。

言われたその場ではブルーノもエミーも、その議員ににこやかに応対した。

しかし数日後に、その議員は「何者」かにスキャンダルを暴かれて失脚した。

「何者」かが誰なのかは「不明」ということになっている。

「任せて、ブルーノ。今回は、政敵を潰すために使っている手段を、あなたを助けるために使うから！」

次の日の朝、南アルテース連邦共和国大統領兼西アルテース公国女王である聖女メイベルは、朝食を摂りながら新聞の朝刊を読んでいた。

読んでいるのは、帝国タイムス、インペリアル新聞、ソロリエンス新聞の帝国三大全国紙である。

メイベルは政治家として、社会の動きを知ることが欠かせないので、毎日新聞を読んでいる。

「うーん。やっぱり、ここ数日、ブルーノさんのことを批判する記事が増えているわね」

「メイベル。ブルーノを批判しているって、何に對してだ？」

メイベルのつぶやきに、一緒に朝食を摂っていたナバルが反応した。

「ブルーノさんが帝国剣術大会に出場して、ナバルと戦おうとしていることが批判されているのよ」

「何で、ブルーノが俺と戦おうとしているのが、批判されるんだ？」

ナバルが疑問の表情をメイベルに向けた。

「わたしとナバルの救世の旅の時に、ブルーノさんたちが、わたしたちのことを妨害したでしょう？そのことを批判されているのよ」

「はあ！？救世の旅なんて、そんな昔のことをか！？」

メイベルは、うなづいた。

「そう。昔のことよ。わたしは気にしていないし、ナバルも気にしていないわ。でも、そのことを騒ぎ立ててブルーノさんの足を引っ張ろうとする人たちがいるの」

「だったら、その人たちに『俺たちは気にしていない』と伝えれば、いいんじゃないか？」

メイベルは首を横に振った。

「それは駄目なのよ。ブルーノさんがサクラス帝国に対してテロ活動をしていたのは、動かせない事実だし、消せない過去なのよ。政治的な取引の結果として、ブルーノさんのしたテロ活動は、犯罪として扱われてはいないから法的には何も問題は無いのだけれど…」

…」

メイベルは、読んでいた新聞記事をナバルに見せた。

「うーん。『ブルーノ・アサツシニオは帝国剣術大会において、再びソルティス教と戦おうとしている。過去に対する反省が無い』って大きく書いてあるなあ……。メイベル。俺たちの方からブルーノのために何かしてやることは、できないのか？」

メイベルは悩んだ顔になった。

「それができないのよ。その記事の裏には、南アルテースでブルーノさんを追い落とそうしている政治勢力が関わっているわ。その人たちは間違いなくソルティス教徒の政治家なのよ」

「ひょっとして、メイベル。この記事の黒幕が誰だか分かっているのか？」

「分かっているわ。大統領直属の情報部に調べさせたから」

「だったら、メイベルが大統領として、そいつに『止める』と言えば、済むんじゃないか？」

メイベルは顔を歪めた。

「わたしが『大統領』でソルティス教とドラゴン教両方の『聖女』だから、かえってブルーノさんのために何かをすることは、できないのよ」

「どういうことだ？」

「ソルティス教徒とドラゴン教徒は、長年の対立関係から和解してお互いの撲滅を目指すような人たちは激減したわ」

メイベルは、うんざりした顔になった。

「でも政治や経済とかの分野で、ソルティス教徒とドラゴン教徒、どちらが主導権を取るかで、こだわっている人たちは大勢いるのよ。ここでわたしが、ブルーノさんの味方をしたら『聖女メイベルがドラゴン教徒の側に付いた』なんて騒ぎ立てられるわ。下手をしたら、南アルテース内戦が再び起きる火種になりかねないのよ。だから、わたしはブルーノさんのために何かをすることができないのよ」

メイベルは、テーブルに広げていた新聞のページをめくった。

「ブルーノさんは、奥さんのエミーさんはソルティス教徒だから、ソルティス教徒、ドラゴン教徒なんて枠には、こだわっていないんだけど……」

新聞を何となく、めくりながら、眺めていたメイベルは、めくっている手を突然止めた。

そして、そのページを真剣に読み始めた。

「どうした？メイベル？何か興味を引くような記事でも、載っていたのか？」

メイベルは笑い出した。

「わたしが、何かする必要は無いみたいよ。ナバル。これを見て！」

メイベルはナバルに新聞を渡した。

「何だこりゃ？絵物語か？」

ナバルはメイベルが指差したページを見た。

「違うわ。マンガよ」

「マンガ？」

「そう。最近新しく発明された表現方法よ」

これまでであった絵物語では、絵の横に文章が書かれていた。

マンガでは「フキダシ」の発明により絵の中にセリフが書けるようになり、それと「コマ割り」の発明により、絵物語より絵の表現に幅が出来た。

長身で長髪、メガネをかけた青年とボサボサの髪をした少年が、真剣を向け合っている。

憎しみの目で、にらみあっている。

二人は真剣を交えて、戦いを始めた。

激しい戦いにより、お互いの真剣で傷つき、出血して二人とも地面に倒れた。

地面に倒れて動けなくなっている二人に、長髪の男には小柄な女性が、ボサボサ頭の男にはピンクブロンドの女性が近づいた。

女性たちは治癒魔法で、剣士たちを治療すると、真剣を取り上げて、木刀を渡した。

「木刀では、相手を倒すことができない」

男たちは抗議した。

女たちは言った。

「あなたたちは、相手を倒したいの？それとも自分の力を相手に認めさせたいの？」

「相手を倒せば、自分が相手より強い証明になる」

「それならば、相手の命まで奪う必要は無いでしょう？戦場での剣術と違って、スポーツとしての剣術は相手と競い合うことで、自身を精神的・肉体的に高めることが目的なのでしょう？」

二人の男は、うなづいた。

そして木刀を持つと、お互いに構えた。

今度は憎しみの目でにらみ合うのではなく、好敵手としてお互いを見つめ合った。

そして試合が始まった。

「えー。このマンガの登場人物って、俺とメイベルとブルーノとエミーさんがモデルだよな？」

新聞の一面に描かれていたマンガを読み終わったナバルは、メイベルにたずねた。

「そうよ。このマンガを描いたのは多分エミーさんね。新聞に広告料を払って自分のマンガを載せたのね。帝国三大紙全部に載っているわ。これは宣伝として効果的だわ」

「効果的って、何だ？」

「堅苦しい文章より、分かりやすいマンガの方が大勢の人が読むから影響力は大きいわ。これでブルーノさんを批判する記事の印象は薄くなって、スポーツとしての剣術大会の印象が強くなるでしょうね」

メイベルの予想通り、ブルーノへの批判は大きな騒ぎとならずに沈静化した。

そして、いよいよ帝国剣術大会開催当日を迎えることになった。

第七章 帝都サクラスにて その3（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

第八章 帝国剣術大会 その1

帝国剣術大会の開催日には、サクラス帝国の全土で教会や街の広場や公園などに、たくさんの群衆が集まった。

人が集まる公共の場所には、有線放送の受信機とスピーカーが設置されている。

個人で自宅に受信機を設置している家庭もあるが、まだ高価なため、ごく少数である。

そのため有線放送を聴きたい大多数の人は、自宅から出かけて、街頭放送を聴くのが普通である。

大勢の人々が、スピーカーから流れてくる音声に耳を傾けていた。

「……以上を持ちまして、帝国剣術大会開会式は無事に終了しました」

スピーカーから流れてくる音声は、女性の声だ。

「晴天の中。ここ帝都サクラスの帝立競技場は、十万人の大観衆！大会第一日目第一試合の開始を今か今かと、待っています」

ここで女性の声は、一拍置いた。

「放送の冒頭でも紹介した通り、この放送の実況担当は、わたくしレジーナ・テルルが、そして解説担当は……」

レジーナが言葉を切ると、男性の声が聞こえてきた。

「拙者、マーク・クリプトンがお送りする」

レジーナは話を続けた。

「さて、試合の前に改めて、剣術大会のルールを説明いたします。競技場の中央には直径百メートルの円形の試合場が設けられています。試合場の中央には開始線が二本有り、四メートル離れております。選手二人は開始線の上に立ち、お互いに構えた状態から、審判の『始め！』の号令で試合開始となります。試合時間は決勝戦以外は三十分、決勝戦は時間無制限となります。」

紙をめくる音が聞こえてきた。レジーナはルールが記載された書類を確認しているようだ。

「試合の勝敗は決勝戦は、選手のどちらかがノックアウトかギブアップするまでです。決勝戦以外は制限時間以内に勝負がつかなかった場合は、判定になります。一試合で試合場から外に出るのが合計三回となった選手は負けとなります」

レジーナは言葉を一旦切った。

「さて、クリプトン卿。ルールでは魔法の使用も可能となっていますが、そうになると、魔法が使える選手の方が有利ということになりますでしょうか？」

「魔法が使える方が有利とは、限りません」

クリプトン卿は、レジーナの質問を否定した。

「魔法が使えると言っても、剣術大会ですので、攻撃魔法を相手にぶつけることは禁止されており、行った者はただちに反則負けになります。試合中に有効に使える魔法は飛行魔法だけになります」

「しかし、クリプトン卿。飛行魔法を使える選手の方が有利だという点は、変わらないのでは？」

「何をやってもよい実戦ならば、そうです。飛行している人が地面に立っている人に対して、相手の武器の届かない高さから、魔法で攻撃したり、石などを投げつけたりと、一方的に攻撃できますから、有利になります。しかし、剣術大会では剣のみでしか攻撃が許されておりませんので、一方的に攻撃することはできません」

「それならば、飛行魔法でずっと飛んでいれば相手から攻撃されないのではないのですか？」

「そうですが、それだと判定負けになりますし、時間無制限の決勝戦では、飛行魔法を長時間使用すれば疲労した状態で地面に降りなければなりませんから、結局不利になります」

「なるほど、よく分かりました。あっ！？第一試合の両選手が入場して来ました！」

スピーカーからは十万人の観客の大歓声が聞こえてきた。

「注目の第一試合！出場選手の一人は、オクトー・アグディカニス。言わずと知れた前大会まで三回連続優勝！今大会に四連覇がかかっております。数年間山に籠もり修行したという成果を、どう見せるのか？クリプトン卿。わたしは前大会の時に一応この競技場にいた

のですが、オクトー選手の試合内容を覚えていないのですか、どのような剣士なのでしょう？」

「剣士は力タイプか技タイプか、どちらかに傾いている者が多いのですが、オクトー選手は力と技のバランスがよく取れています。おそらく、巧みな試合運びを見せてくれるでしょう」

「なるほど、オクトー選手は顔を覆うほどに髪と髭を伸ばし放題で熊の毛皮の服を着ています。オクトー選手、開始線の位置に着きました。審判の号令により、いよいよ試合開始となります」

「レジーナちゃん。レジーナちゃん」

クリプトン卿が、何かを注意するような口調になった。

「何ですか？クリプトンおじさま。放送の前に、レジーナ、クリプトン卿と放送中は呼び合うと決めたじゃない」

「レジーナちゃん。忘れてる。忘れてる」

クリプトン卿は、焦った口調になった。

「忘れてるって……。何をですか？」

「もう一人の選手の紹介を、忘れてる！」

スピーカーからは、紙を慌てて引つ掻き回す音が聞こえてきた。

「ごめんなさい。オクトーさんにはかり注意して、忘れていたわ。もう一人の選手について書かれた紙は、紙は……」

レジーナの焦った様子に、有線放送を聞いている聴取者たちから、笑い声が上がった。

「あっ!？」

スピーカーから、レジーナの驚いた声が聞こえた。

それっきり、レジーナの声もクリプトン卿の声も聞こえなくなり、観客の歓声も聞えなくなった。

十数秒が経過して、聴取者が「放送機器の故障か？」と思い始めた時、スピーカーから音が流れてきた。

さっきまでの何倍もの大歓声であった。

「失礼いたしました。実況担当のレジーナです。十数秒間音が無かったのは、放送機器の故障ではありません。有線放送をお聞きになっている皆様は、音のみです。何が起こったのか、分からないでしょうから、ただ今より詳細を説明します」

レジーナは気分を落ち着けようとしているらしく、何度も息を吸ったり吐いたりする音が聞こえた。

「オクトー選手は、審判の『始め!』の号令と同時に動き、相手選手を頭部への木刀の一撃でノックアウト!一瞬で勝負を決めました!あまりに素早く見事な一撃に、わたしも観客も呆然としてしまい、十数秒間、無言となっていました」

レジーナの放送を聞いている聴取者からも、歓声が上がった。

「いや！ちよつと、待ってください！」

レジーナは怪訝な声を出した。

「主審はオクトー選手の勝ちを宣言しましたが、審判員二人が異議を申し立てました」

スピーカーからは観客が騒めく声が流れてきて、スピーカーの前の聴取者も騒めいた。

「申し遅れましたが、剣術大会では審判は五人います。試合場の中心に主審が一人、東西南北に審判員が一人ずつです。審判員二人は何を異議の申し立てをしているのでしょうか？あつ！？今、情報が入ってきました！」

レジーナはメモの紙を渡されたらしく、それを読み上げた。

「情報によりますと、審判員二人は主審が『始め！』の号令をする前に、オクトー選手は動き始めたと主張しているようです。クリプトン卿。こういう場合は、どうなるのでしょうか？」

「号令の前に動いたのが事実ならば、その選手は反則負けになります。しかし、拙者の個人的な見解ですが、オクトー選手は号令と同時に動きました。何ら反則行為はしていません。しかし、剣術大会の判定は審判に任せられているので、拙者は口を挟めません」

「なるほど、審判団の協議の結果を待ちましょう」

その後、十分近くが経過した。

「審判団の主張が食い違い。なかなか結論が出ないようです。審判団が判定できない場合は、どうなるんでしょうか？クリプトン卿」

「その場合は、ソルティス教の神官によるくじびきの神儀で判定が決まり……」

「あつ！？貴賓席にいるメイベルから……。いや、貴賓席にいらつしやる聖女メイベルから何か提案があるようです。回ってきたメモを読みますので、聴取者の皆様は少々お待ちください」

「レジーナちゃん。メイベルは、何を提案したのかね？」

「ちょっと、待ってよ。おじさま。えー、聖女メイベルは試合が映画のために撮影されており、一秒間に七十二コマの映像があります。それを見れば、オクトー選手が主審の号令の前に動いたか、どうか分かるそうです」

「撮影した映像を見て判定するなんて、前例が無いぞ！」

「前例が無いので、審判団も聖女メイベルの提案を拒否しているようです。どうやら審判団は神官によるくじびきの神儀により、勝敗を決めることにしたようです」

スピーカーからはメイベルの「試合の勝敗をくじびきで決めるなんて、馬鹿らしいわ！」「前例が無いのは当たり前よ！撮影機ができたのは、つい最近なんだから！」「ナバルは見たのよ！オクトーさんが号令と同時に動くのを！」と大声で叫んでいるのが、聞こえてきた。

「あつ！？聖女メイベルが飛行魔法で試合場の中央に降り立ちました！」

試合場では審判団にメイベルが怒鳴っていた。

「しかし、聖女さま。我々審判はルールブックに基づいて判定しているんです。前例の無いことを判定の材料にするわけには……」

困惑している主審に向かって、メイベルは自信満々に胸を張った。

「前例があれば良いのね？もちろんあるわよ。五十年前にね！」

「五十年前には、撮影機は無かったのでは？」

メイベルは説明を始めた。

五十年前には、写真機も撮影機も無かった。ソルティス教会の絵画係が試合の様子をスケッチしていた。

絵画係は写真機が発明される前は、事件や事故、イベントなどの記録を絵に描いて残すのが仕事だった。

当時の絵画係の一人に、特異な能力を持つ者がいた。

その人物は見たままを描くことしかできず。普通の人間が目で捕え

ることのできない一瞬を、捕えることができた。

そのため剣術大会での微妙な判定に、その絵画係の描いた絵が参考
にされたことがあった。

「絵画係が描いた絵を参考にすると、撮影した動画を参考にする
のも同じ事でしょう？前例はあるのよ」

「なるほど、そういう事でしたら……」

審判団は、メイベルの提案を受け入れた。

撮影された動画を見た結果、オクトーが号令と同時に動いたことが
判明したので、オクトーの勝ちとなった。

このことは、あらゆるスポーツに映像による判定が導入される切っ
掛けになった。

「続きまして、第二試合です！」

レジーナがマイクに向けて声を出していた。

「ブルーノ・アサッシニオ選手の入場です！」

第八章 帝国剣術大会 その1（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

第九章 帝国剣術大会 その2

有線放送の受信機のスピーカーからは、大歓声が聞こえてきた。

第一試合より女性の声が多い。

大勢の女性の声で観客席からの「ブルーノさま！頑張って！」という声も聞こえてくる。

「第二試合の実況担当は、引き続き、わたくしレジーナ・テルル、解説はクリプトン卿でお送りします」

レジーナは一拍置いた。

「そして特別ゲストとして、第二試合に出場するブルーノ・アサツシニオ選手の奥様であるエミー・アサツシニオさんに放送席に来ていただきました。エミーさんよろしくお願いします」

「レジーナさん。もう一度言ってください」

エミーの声が流れた。

「えっ！？エミーさん。よろしくお願いします……」

「違います！その前です！」

「ブルーノ・アサツシニオ選手の奥様であるエミー・アサツシニオさんに……」

「そう！それです！奥様……、ああ、何て素晴らしい言葉なんでしょう！人から言われると、あたしがブルーノの妻である喜びがますます大きく感じられて……」

「あ、あの、エミーさん！？うつとりした表情で固まっていなくて、仕事に戻ってください！」

「あつ！？すみません。レジーナさん。うつかりしてました。この場をお借りして、お伝えしなければならぬことがあるんです」

「伝えなければならないこと？それは何ですか？エミーさん」

「あたしの『夫』であるブルーノ・アサツシニオが……」

エミーは「夫」という言葉を強調した。

「写真雑誌にカラー写真が掲載されて以来、女性ファンが急増しました。今この競技場の観客席にも、あたしの夫であるブルーノ目当てで来ている女性ファンが大勢います。放送を聞いている皆さんは、歓声を聞いてください」

ここで、エミーはいったん黙り込んだ。

観客の歓声は女性の方が大きく、ブルーノに向けての物がほとんどである。

エミーは再び口を開いた。

「あたしの夫であるブルーノのファンになった女性の皆さまの気持ちは、分かります。写真の通り、ブルーノは美男子です。整った顔

立ちに、黒髪の長髪に……、長身にバランス良く伸びた手足……。すべてが！美しいんです！」

エミーは力強い声で主張した。

「素晴らしいのは容姿だけではありません！豊富な知識の持ち主であり、その知識を有効に活用することができます。部下思いの良い上司であり、妻であるあたし思いの良い夫であり……」

「ちょ、ちょっと待ってください！エミーさん！」

レジーナがエミーを止めた。

「エミーさん。ご主人のブルーノ選手の惚気話でしたら、別の機会に……」

エミーは、レジーナの言葉の「ご主人のブルーノ」という所にだけ反応した。

「ご主人……、はい！ブルーノはあたしの主人です！人から言われると、あたしとブルーノが夫婦である喜びが、ますます大きく感じられて……」

「エミーさん！うつとりした表情で固まっていけないで！戻って来て下さい！」

「すみません。私が言いたいののは、放送をお聞きになっている皆さんで、新聞や写真雑誌がお手元にある方は、ブルーノとあたしが並んで写っている写真が掲載されているページを見てください」

エミーは数秒間黙り込んだ。放送を聞いている人たちが、目的のページを見つけるのを待っている。

「見つけれましたか？写真の側には、ブルーノに対して、あたしは何者なのかの説明文がありますか……」

エミーは大きく息を吸うと、大声を出した。

「どれも、あたしのことを『ブルーノの妹』『ブルーノの従妹』『ブルーノの養女』と書いてあるんです！確かに、あたしは見た目は十歳代に見えますけど、二十歳代後半のれっきとした大人です！『ブルーノの妻』なんです！新聞や雑誌の取材を受けた時に、そのことはちゃんと言ったのに！何を勘違いしてるんですか！」

「エミーさん！落ち着いてください！」

レジーナがエミーを鎮めようとしたが、火に油を注いだだけだった。

「これが、落ち着いていられますか！」

エミーは、興奮して放送席のテーブルを拳で何度も叩いている。

大量の紙が散らばる音がした。

「あっ！！出場選手についてメモしておいた紙が、テーブルから落ちて、床に散らばっちゃったわ」

レジーナの嘆きを無視して、エミーは話を続けた。

「この記事のおかげで、ブルーノが独身だと勘違いして、『お付き

合いしてください』とか『結婚してください』とかの女性からのブルーノへの手紙が大量に届くんですよ！！繰り返しますが、あたしエミー・アサッシニオはブルーノ・アサッシニオの『妻』です！！」

エミーは「妻」を強調して言った。

「二度と！そんなふざけた手紙は送って来ないでください！！」

「ブルーノ選手と相手選手が、双方開始線の位置に着きました。間もなく試合開始です」

レジーナがエミーを落ち着かせるのを諦めて、実況の仕事に戻った。

エミーも言いたいことを言ったら、スッキリしたらしく落ち着いた口調になった。

「レジーナさん。先程は、興奮してしまい。失礼しました。特別ゲストと呼ばれたのですから、その仕事はきちんとします。あたしの夫であるブルーノの最初の動きを目を離さずに、よく見ていてください。きっと驚きますよ」

「エミーさん。驚くとは、どういう……」

「レジーナちゃん。レジーナちゃん。また忘れてる。忘れてる」

クリプトン卿の声がした。

「何ですか？クリプトンおじさま。また忘れているといのは……、あっ！？」

レジーナは自分が何を忘れたかに気づいた。

「ブルーノ選手の紹介はしたけど、相手の選手の紹介は忘れていたわ。ええと、用意しておいた。メモは……、メモは」

レジーナがガサガサと紙の山をかき回す音がした。

「メモした紙が散らばっちゃったから、どれがどれやら……、ええっ!？」

レジーナの驚いた声がして、クリプトン卿、そして観客席からの大勢の人たちが驚いた声がした。

冷静なエミーの声が受信機から流れた。

「放送をお聞きになっている皆様は、音だけです。何が起きたのか分からないでしょうから、今から説明します。審判の試合開始の合図と同時に、あたしの夫であるブルーノは滑るように素早く後進して試合場の端まで移動しました。試合開始の時の木刀を構えた姿勢のまま手足はまったく動いていません。例えるなら、固形石けんが磨かれた床の上を滑るようにです」

「このような特殊な動きは、今まで見たことはありません。エミーさん。ブルーノ選手は何か新しい魔法を使ったのでしょうか？」

「レジーナさん。あたしの夫であるブルーノが使っているのは魔法ですが、昔からあるありふれた魔法です」

「ありふれた魔法!?!?このような魔法は、見たことも、聞いたこともないですよ?」

「飛行魔法です」

「飛行魔法！？」

レジーナはエミーの答えに驚いた。

「レジーナさんが驚かれるのは分かります。普通戦闘での飛行魔法というものは、高い高度を飛ぶものですからね。第一試合でクリプトン卿が解説していたように飛行魔法が戦闘で有利なのは、地面いる相手に対して高い位置から一方的に攻撃できることですからね」

「でも、クリプトンおじさまが言っていましたたが剣術大会では、木刀以外で攻撃すると反則負けになりますから、飛行魔法を使うのはあまり意味が無いと……」

「その通りです！だからあたしの夫であるブルーノは妻であるあたしエミーと協力して、飛行魔法を改良しました！」

「飛行魔法を改良？」

「あたしの夫であるブルーノは数ミリの高さを飛んでいるんです！」

「数ミリの高さ！？だから地面を滑っているように見えるんですね？」

「その通りです。この飛行魔法が、剣術の試合でどのように有利になるのか、よく見ていてください」

「相手選手！すいません。名前を書いたメモが見つからないので、

こう呼ばせていただきます。ダッシュでブルーノ選手に向かって行きます！」

レジーナは実況の仕事に戻った。

「速い！ブルーノ選手！凄まじい速さで、相手選手から離れていきます！」

「あたしの夫であるブルーノは、時速約四十キロで数ミリの高さを飛んでいるのです。人間が普通に走る速さでは追いつくのは、不可能です」

「でも、避けてばかりでは、勝てないのでは？あっ！？ブルーノ選手が、こちら……、放送席の方を向きました！」

「あたしの夫であるブルーノは妻であるあたしエミーに向けて手を振っています。あれは、次で相手に止めを刺すという合図です。よく見ていてください」

「あの、エミーさん？そう何度も『妻』『夫』と口にされなくとも……」

「あたしとブルーノが『夫婦』だと強調しておかないと、またふざけた手紙を送って来る女性が出ます！木刀を構えたブルーノの姿は、あんなに凛々しくて格好良いんですよ。女性なら誰でも惚れてしまいます。妻であるあたしエミーも、改めて惚れてしまいました。ああ……、格好良い……、あたしがブルーノの妻だなんて……、今でも夢を見てるみたい……」

「うつとりした表情で固まってしまったエミーさんのことは放って

おいて、実況を続けます。ブルーノ選手今度は高速で、相手選手に近づいて行きます」

受信機のスピーカーからは、大歓声が聞こえてきた。

「勝負が着きました！ブルーノ選手、相手選手に高速ですれ違うと同時に相手のお腹に向けて横殴りに木刀を振るい、一撃でノックアウトです！相手選手、ブルーノ選手の高速にまったく対応できませんでした！」

試合終了後、ブルーノはエミーとともに新聞や雑誌の記者たちのインタビューに答えていた。

大勢のカメラマンの前で、ブルーノとエミーは口づけを交わして、それを写真に撮られたりもした。

インタビューが終わって、二人きりになると、ブルーノとエミーはお互い顔を赤くした。

「エミー、わたしたちがキスするところを写真に撮らせるのは、やりすぎだったのではないですか？恥ずかしいですよ」

「あたしだって恥ずかしいわよ！ブルーノ！でも、これで明日の新聞の朝刊には、あたしとブルーノが『夫婦』だということが、写真の説明文にちゃんと書かれることになるわ」

しかし、次の日の新聞朝刊には、ブルーノとエミーがキスをした写真の説明文には「幼い少女から、勝利の祝福のキスを受けるブルーノ選手」と書かれており、エミーを怒り狂わせることになる。

「続きまして、第三試合になります!」

レジーナがマイクに向けて声を出していた。

「クラウド・アキロキャバス選手の入場です!」

第九章 帝国剣術大会 その2（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

第十章 帝国剣術大会 その3

有線放送の受信機のスピーカーからは、レジーナの声が流れた。

「クラウ・アキロキヤバス選手の入場……、のはずなのですが……」

レジーナの声は戸惑っている。

「クラウ選手が、まだ試合場に入場して来ません。いったい、どうしたのでしょうか……、あっ!？」

レジーナの驚いた声が流れた。

「ちょっと！クラウ！何故？放送席に来ているのよ。もうすぐ、試合の開始時間よ。えっ!？名前を略さずに言ってくれ？分かったわよ。ロード・クラウ・アスピス・リ・フロレス・ド・アキロキヤバス・ユーベラス選手です。ほら、言ったわよ。このために、わざわざ放送席に来たの?」

放送席の机の上に、紙の束が置かれる音がした。

「何なの？この分厚い紙の束は？メイベルへの愛の言葉を書き連ねた物？放送で読み上げてくれ？クラウ。あんたねえ……」

レジーナは重い溜め息を吐くと、今度は怒声を放った。

「放送を私物化するんじゃ、ないわよ！さっさと試合場に行きなさい!この紙の束も置いていかないで持って行きなさい!」

慌てて走り去る足音がした。

「放送をお聞きの皆さま、失礼いたしました。実況のレジーナ・テ
ルルです。引き続き、解説はクリプトン卿、そして特別ゲストに……」

ここでレジーナは一拍置いた。

「第二試合に出場したブルーノ・アサツシニオ選手に来ていただきました。
試合を終えたばかりで、わざわざ来ていただいて、ありがとうございます。ブルーノ選手」

「先ほどの、わたしの試合中には、妻のエミーが放送を私物化した
ようで大変失礼いたしました。夫として謝罪いたします」

「いえ。いえ。お気になさらずに、ブルーノ選手。エミーさんへの
抗議の電話が放送局に殺到したそうですが、『エミーさんの喋りが
面白い』という電話の方がはるかに多かったので、放送を聞いた皆
さまの間では、エミーさんの評判は良かったようです」

「そう言ってもらえると、少しは気持ちが楽になります」

レジーナは話題を切り替えた。

「この第三試合に出場する二名の選手を紹介いたします。一人目は、
クラウ・アキロキャバス選手。フルネームは省略させていただきます。
ユーベラス公国出身で現在は、この帝都を守る近衛騎兵隊に所
属しています。そして、もう一人は……」

レジーナが紙をめくる音がした。

「えっ！？何これ！？愛するメイベルちゃん。僕の愛を……、これ！クラウドが持ってきた紙束じゃない！クラウド自分との間違えて、あたしの放送用のメモの束を持って行っちゃったのね！また、選手の紹介ができないじゃ、ないの！」

レジーナの嘆きをよそに、主審の試合開始の「初め！」の号令が鳴り響いた。

「初め！」の合図が観客の歓声で分かりにくいという批判もあったので、主審の声を拡声器で電氣的に増幅して場内放送で流している。試合開始と同時に大勢の観客の驚いた声が出た。ただし、ブルーノが数ミリの高さを飛ぶ飛行魔法を披露した時よりは声は小さかった。

「クラウド選手。第二試合のブルーノ選手とまったく同じ動きをしています。木刀を構えた姿勢のまま、手足をまったく動かさずに試合の端まで移動しました！クラウドたら、ブルーノ選手の単なるモノマネをするなんて、プライド無いかしら？」

「レジーナさん。クラウド選手の名誉のために言っておきますが、クラウド選手が今やっていることは、わたしの単なるモノマネではありません」

ブルーノがレジーナの言葉を否定した。

「どついうことなのでしょう？ブルーノ選手」

ブルーノは解説を始めた。

「クラウド選手が今やっているのは、飛行魔法で数ミリの高さを時速約四十キロで飛ぶという。わたしが試合でやったことと同じです。しかし、この魔法は難しくて人のやったのを一度見ただけでは、できるようにはなりません。かなりの魔法の訓練が必要です。わたしとクラウド選手は、偶然にも同時期に新しい超低空飛行魔法を思いついたのでしよう。わたしの試合が先でしたからクラウド選手がわたしのマネをしたように見えますが、もしわたしの方の試合がクラウド選手より後でしたら、わたしがクラウド選手のマネをしたように見えただろう」

「そうなんでしょうか？クラウド選手も飛行剣士としては、高いレベルにありますから、一度見ただけでもマネできるんじゃないですか？」

レジーナは、イマイチ納得していないような声を出した。

「レジーナさん。超低空飛行魔法がどのくらい難しいのか、例え話で説明しますね。ベースボールのピッチャーがマウンドからキャッチャーにボールを投げる場合を想像してください」

「はい、ブルーノ選手」

レジーナはブルーノに相槌を打った。

「プロのピッチャーの場合、時速百五十キロ以上の速さのボールを投げることも珍しくありませんが、時速百五十キロのボールを地面から数ミリの高さで投げて、ピッチャーの手を離れてから、キャッチャーのミットまでノーバウンドで数ミリの高さを維持したままのボールを届かせることはできるでしょうか？」

レジーナは少し考え込んで答えた。

「かなり難しいでしょうが、練習しだいでは、できるようになるピッチャーもいるのでは？」

ブルーノはうなづいた。

「その通りです。かなり難しいですが、練習しだいではできるようになります。超低空飛行魔法は、今の例え話の何倍も難しいのです。かなりの練習をしなければ、できるようにはなりません。クラウ選手もわたしと同じように長期間の練習をして超低空飛行魔法を可能にしたのです」

「なるほど、分かりました」

そこに大歓声が上がった。

「あっ！？実況担当のレジーナです。ただ今の大歓声の理由を説明いたします。クラウ選手が飛行高度数ミリの超低空飛行のままで、試合場を縦横無尽に動き回っています。飛行していると言うより、スケートで滑っているように見えます。ユーベラス公国で盛んなスポーツであるアイススケートによるフィギュアスケートの選手のように、華麗な動きで試合場を動き回っています」

ブルーノがクラウを称賛した。

「確かに華麗な動きです。かなり超低空飛行魔法を練習したのが、これからも分かります」

「見事な動きだと、拙者も思うが……」

解説のクリプトン卿が疑問を口にした。

「このフィギュアスケートのような動きは、剣術の試合としては、どのような意味があるのだ？ クラウ選手は相手選手のことを無視して動き回っているように、見えるが？」

ブルーノがクリプトン卿の疑問に同意した。

「確かに変な動きです。試合場に大きな円形の線を描くように、クラウ選手は同じ所をグルグル動いています」

「大きな円形の線を描くように、ですって？」

レジーナはブルーノの言葉を聞いて、クラウの動きを注意深く観察した。

そして何かに気づくと、呆れた声を出した。

「まったく……、クラウったら、何をしているのよ……」

「レジーナちゃん。クラウ選手は何をしておるのだ？」

クリプトン卿の質問に、レジーナは呆れた声のまま答えた。

「ハートマークよ」

「ハートマーク？」

「そう。クラウはハートマークを試合場に描くように超低空飛行を

しているのよ」

「本当だな。確かにクラウド選手は、ハートマークを描いておる。しかし、それに何の意味があるのだ？」

レジーナは答えるのが嫌そうな顔になったが、答えないわけにはいかないで、搾り出すように声を出した。

「貴賓席で観戦しているメイベルに向けて、クラウドは愛情表現をしているつもりなのよ。でも……」

レジーナは双眼鏡で貴賓席のメイベルを見た。

「メイベルはまったく気づいていないようね」

観客席から大歓声が上がった。

レジーナは実況の仕事に戻った。

「クラウド選手、相手選手の待ち伏せにあいました。相手選手、ベースボールのバッターボックスに立つバッターのように高速で移動するクラウド選手を待ち伏せ。木刀をバットでボールを打つように振り、クラウド選手のお腹へ強烈な一撃！クラウド選手地面に倒れ込みました！クラウド選手、貴賓席の聖女メイベルの方ばかり見ていたため、相手選手の待ち伏せにまったく気づきませんでした」

ブルーノが呆れた声で解説した。

「時速四十キロは飛行魔法としては高速ですが、ベースボールのバッターが時速百キロ以上のボールを打てるように、クラウド選手が同

じコースをグルグルと回っているのでは、相手は簡単に待ち伏せができます」

レジーナは実況を続けた。

「クラウド選手立ち上がりました。どうやらノックアウト負けはまぬがれたようです。あっ！？相手選手、飛行魔法で空中高く舞い上がりました！」

クリプトン卿が解説した。

「どうやら、相手選手はこれ以降は逃げ回って、判定勝ちを狙っているようだ」

「どういうことでしょうか？クリプトン卿」

レジーナの質問にクリプトン卿が答えた。

「相手選手はすでにクラウド選手に一撃を決めている。このまま試合終了時間まで空中を飛んで逃げ回れば、相手選手の判定勝ちになる」

「しかし、クラウド選手も飛行して相手に追いつけば良いのでは？」

クリプトン卿はレジーナの言葉を否定した。

「人間が飛行魔法での最高速度は時速四十キロだ。クラウド選手も相手選手も同じ速度なのだから、クラウド選手は相手に追いつけない。どうやら、この試合はクラウド選手の負けのようだな」

「クラウド選手の勝ちですね」

ブルーノがクリプトン卿の言葉に重なるように言った。

「ブルーノ選手、ということなのでしょうか？」

レジーナの疑問にブルーノは解説した。

「飛行魔法の最高速度四十キロというのは、直線で飛んだ場合です。曲がればスピードは落ちます。しかし、超低空飛行魔法を使えるようになると、時速四十キロのまま曲がれるのです」

場内が大歓声になった。

「クラウ選手、相手選手が空中で曲がった時に追いつき、相手の頭部に木刀で一撃を決めました！相手選手地面に叩きつけられました！クラウ選手、ノックアウト勝ちです！」

クラウは、試合終了後の新聞記者や雑誌記者などの報道陣の試合についてのインタビューにまったく答えることなく、一方的にメイベルへの愛の言葉を書き連ねた紙の束を報道陣に渡して、新聞や雑誌に掲載してくれるように頼んだ。

その結果、その日の帝立競技場のゴミ箱に捨てられる紙の量が普段より少し増加した。

「続きまして、第四試合になります！」

レジーナがマイクに向けて声を出していた。

「ナバル・フェオール選手の入場です！」

第十章 帝国剣術大会 その3（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第十一章 帝国剣術大会 その4

「第四試合の実況担当は引き続き、わたくしレジーナ・テルル。解説はクリプトン卿でお送りします。そして……」

レジーナは一拍置いた。

「特別ゲストとして、聖女メイベル・ヴァイスさまにおいでいただきました。聖女メイベルさま。よろしくお願いします」

「メイベル・ヴァイスです。よろしくお願いします」

メイベルはマイクに向けてそう言っただけで、後は試合場の方を見て黙り込んだ。

レジーナは困惑した。

（メイベルはいつものように興味のある分野のことを延々と話すが、エミーさんみたいに勇者くんの惚気話をするかと思っていて、長くなるようなら止めなきゃと思っていたのに……、メイベルが黙り込んでしまったら、放送として面白くないわ。仕方ないわ。危険かもしれないけど、あたしの方から話を振りましょう）

「この試合に出場される勇者ナバルさまは、聖女さまの長年のパートナーですよ？」

レジーナはメイベルにこう話を振れば、メイベルが長々とナバルの惚気話をすると考えたので、それを止めることで放送を聞いている人たちの笑いを取ろうとした。

「そうね」

メイベルはそう言っただけで、試合場の方を見て黙り込んでた。

レジーナは、ますます困惑した。

（メイベルとは長い付き合いだけど、こんなに喋らないメイベルは初めてだわ。とにかく、思い付く限りのことをドンドン話に振ることにしよう）

「聖女さまは、南アルテースの大統領と西アルテースの女王を兼ねられていますから、お仕事は大変ではないですか？」

「そうね」

「今も、さまざまな新しい発明品の開発に取り組んでいらっしやるようですが、どんな物を開発中なのでしょうか？」

「まあ、色々とやってるわ」

レジーナは、他にも次々と話をメイベルに振ったが、メイベルは一言返事をするだけだった。

（こんなメイベルを相手にするのは、調子が狂うわね。この話だけは振りたくなかったんだけど……）

「聖女さまは勇者ナバルさまよりプロポーズされたそうですが、くじびきの神儀により、勇者さまがハズレくじを引いてしまい『一年間お預け』になったそうですね。今のお気持ちはいかがですか？」

レジーナは、その時その場にいてくじびきの串の入った筒を持っていた。

ナバルがハズレくじを引いてしまったことのメイベルの愚痴を長々と何時間も聞かされたのだ。

（この話を振れば、またメイベルは愚痴を長々と言うわ。そこを、あたしが止めて、放送を聞いている人の笑いを取ると……）

レジーナは、そう計算したのだが……。

「別に……」

レジーナは座ったまま頭を机にぶつけて、ズッコケた。

（どうしたのかしら？今日のメイベルは？）

メイベルと会話する時には、周りの人間は自然と漫才で言うところの「ツツコミ役」になる。

メイベルが周りの空気を読まずに長々と話をする「ボケ役」になるので、親しい人間、例えばナバルやパセラがツツコミをして止めるのだ。

そのため、メイベルが長々と話すという「ボケ」をしないと、周りの人間が「ツツコミ」できないため、話が続かないのだ。

「聖女さまは、第一試合のオクトー選手の時に審判団に意見して映像判定を導入されましたが、勇者さまのライバルのオクトー選手の

味方をするようなことをしたのは、『敵に塩を送る』というモノでしょうか？」

レジーナはほとんど自棄になって、この話をメイベルに振った。

「いいえ。『敵に塩を送る』というわけじゃ無かったのよ。オクトーさんの試合がナバルより先で良かったわ」

レジーナはメイベルがようやくまともに反応したので、さらに話を振った。

「何故？オクトー選手の試合がナバル選手より先で良かったのですか？」

「だってナバルの試合で、わたしが映像判定をするように意見することはできないじゃない。自分で言うのもなんだけど、わたしは聖女で、大統領で、女王なんだから、わたしが権威と権力を使って判定をナバルに有利なようにねじ曲げようとしているように見えるでしょ？」

レジーナは、メイベルの言葉の意味を数秒間考えた。

そして結論を出した。

「つまり、勇者くんも……、オクトーさんと同じ……」

「始まるわよ！レジーナ！」

レジーナが試合場の方を見ると、ナバルと相手の選手がすでに開始

線の位置に着いていて、主審の試合開始の合図を待つだけになっていた。

メイベルに話を振ることに夢中になっていたレジーナは、気づかなかったのだ。

「よく見ていて、一瞬で終わるから！」

主審の「初め！」の合図が鳴り響いた。

一瞬後に場内は、大歓声に包まれた。

「実況のレジーナです！ナバル選手は、主審の『初め！』の合図と同時に動き、相手の頭部への木刀の一撃で、ノックアウト！一瞬で勝負を決めました！第一試合のオクトー選手と同じ結果です！」

観客席が今度は騒めいた。

「あつ！？主審はナバル選手の勝ちを宣言しましたが、審判員二人が『ナバル選手が試合開始の号令の前に動いたのではないか？』と主張しています。映像判定に持ち込まれるようです。これもオクトー選手の試合と同じですね」

「レジーナ、言うておくけど、ナバルのしたことはオクトーさんの単なるマネじゃないわよ」

「それは、どういうことでしょうか？聖女さま」

メイベルは深呼吸すると、張り切って話始めた。

「剣の試合で、相手に必ず勝てる方法は何だと思う？」

レジーナはメイベルの質問に、少し混乱した。

「ええつと……、勝負はどう転ぶか分からないモノだから、必ず勝てる方法なんか無いんじゃない？」

メイベルは、レジーナの答えにうなづいた。

「その通りよ。歴史上の有名な剣士の言葉で『最強の剣士とは、最弱の剣士との勝負を怖れる者だ』というのがるように、強い剣士ほど勝負の怖さを知っているのよ。だから勝負に必ず勝つには、勝負をしなければ良いのよ」

「あの……、メイベル……、そもそも勝負をしなければ試合にならないのでは？」

「ナバルが試合でやったことを詳しく説明するわね。審判の試合開始の号令と同時に動いて、相手の頭を木刀で一撃してノックアウトする。言葉にしてしまえば簡単だけど、どれほど難しいか分かる？」

「審判の試合開始の号令と同時に動くのは、早かったら失格になるわね。同時に動くことで相手はまだ動き出してはいない……。なるほど。動いてない相手は止まっている標的のようなモノなのね。メイベルの言った『勝負をしない』というのは、そういう意味なのね」

「相手が何もしない内に一撃でノックアウトする。これがナバルが勝つために考えた結論なのよ。相手がどんな力や技を持っていたとしても、やる前に倒してしまえば関係ないわ。オクトーさんも偶然ナバルと同じ結論だったのね。でも、これには一つ弱点があるのよ

ね」

「弱点？それは何なの？メイベル」

「見ての通り動きが素早いから、審判さんたちは『号令の前に動いた』とミスジャジしやすいのよね。大会前に、あたしは映像判定を導入するように提案したんだけど、審判さんたちは自分の審判としての判定技術に自信を持っているから、受け入れてくれなくて……」

「あつ！？今分かったけど、メイベルが最初黙り込んでいたのは、勇者くんの試合を見逃さなためだったのね？」

「その通りよ。一瞬で終わっちゃうんだもの。話すことに夢中になっていたら見逃しちゃうわ。さあ！ここからは、張り切って話すわよ！」

「あつ！？映像判定の結果が出ました！ナバル選手の勝ちです。特別ゲストの聖女メイベルさま、ありがとうございます。続けて第五試合に……」

メイベルがいつものように長々と話を始めようとしているのが分かったレジーナは、強引に話を締め括ろうとした。

「えーっ！？まだ、話し足りないわよ。まずはねえ……」

メイベルはマイクをガッチリとつかんで、なかなか放そうとしなかった。

結局、試合を終えたナバルが放送席に来て、メイベルに見事なツッコミを決めるまで、長々とメイベルの話は続いた。

メイベルとナバルが放送席から去ってから、レジーナはまたしても相手選手の紹介を忘れたことに気づいた。

剣術大会の日程は、順調に進んでいた。

ナバル、オクトー、ブルーノ、クラウの四人は勝ち進んでいた。

ナバル、オクトーの一瞬の一撃、ブルーノ、クラウの超低空飛行魔法に誰も対抗できず。他の選手たちは次々と敗れ去った。

大会のベスト四が出揃った。

「実況担当のレジーナです。お聞きください。この大歓声！本日は試合はありませんが、準決勝の組み合わせを決める抽選があります！」

レジーナは一呼吸した。

「ナバル、オクトー、ブルーノ、クラウ、四人の選手が進出した準決勝では誰と誰が戦うのか？今、帝国全土の注目を集めています！明日の休養日を一日挟んで、明後日の午前中には準決勝第一試合が、

午後には準決勝第二試合がおこなわれます。あっ！？四人の選手が入場して来ました」

さらに大きな大歓声が起きた。

「四人の選手が中央にあるくじの入った箱に向かいます。くじを引く順番を決めるための抽選はすでにおこなわれており、オクトー選手、ナバル選手、ブルーノ選手、クラウ選手の順番になります」

オクトーは箱に手を入れて、一枚のくじを引いた。

神官はくじを受け取ると、場内放送で発表した。

「オクトー選手、第一試合」

続いて、ナバルが引いた。

「ナバル選手、第二試合」

レジーナがマイクに向けて大声をだした。

「前回の大会の決勝戦を戦ったオクトー選手、ナバル選手の対決は、二人が勝ち進めば再び決勝戦となりました！二人の決勝進出をそれぞれ阻止するのは誰になるのか！？」

「ブルーノ選手、第一試合」

「これで、準決勝は第一試合がオクトー選手対ブルーノ選手、第二試合はナバル選手対クラウ選手になりました。では、放送をお聞きのみなさま、明後日の放送をお楽しみに！」

次の日の休養日、オクトーは帝都サクラス市内にある屋敷の中庭で木刀を構えていた。

そこに、アステルが訪ねて来た。

第十一章 帝国剣術大会 その4（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

第十二章 帝国剣術大会 休養日 その1

広大な屋敷の中庭でオクトーは木刀を構えたまま、長い時間微動だにしなかった。

アステルは黙ってそれを見ていた。

一時間近くオクトーは、そのままの姿勢でいたが、いきなり片足を前に踏み込んで、木刀を振り下ろした。

その一つの動作だけで、オクトーは剣の稽古が終わったらしく、木刀を腰の鞘に戻した。

そこでオクトーは、ようやくアステルに気づいたらしく振り向いた。

「アステル殿。来ていたのならば、声をかけてくだされば良かったのに」

アステルは微笑んだ。

「稽古の邪魔しちゃ悪いと思ったのよ」

そして、アステルは周囲を見回して手を大きく広げた。

「それにしても広いお屋敷ね。この前までこのお屋敷空き家だったと思うんだけど、どうしたの？まさか空き家に勝手に入り込んでいるんじゃない？」

オクトーは首を横に振った。

「もちろん。違う。私が買ったのだ」

「オクトーさんが、買った!？」

アステルは驚いた。

なぜなら、帝都サクラスは超過密都市であり、当然不動産は高い値段で取り引きされており、これだけの広大な屋敷だとかなりの高額になるからである。

「いつまでも近衛隊の詰所で世話になっているわけにもいくまい。地図を調べたら、この屋敷の中庭が剣術大会の試合場とほぼ同じ大きさでな。剣術の稽古に便利だから買ったのだ」

「オクトーさん。わたしが驚いたのは、そこじゃなくて。これだけの屋敷だと、かなりの値段になるでしょ？お金はどうしたの？」

「もちろん。自分の金で買った」

「オクトーさんのお金!」

アステルはまた驚いてしまった。

相変わらず顔を覆うほど髪と髭を伸ばしていて、熊の毛皮の服を着ているオクトーを見ると、とても大金を持っているようには見えなからだ。

「あっ!？アステル殿。私が大金を持っているのを不思議に思っているな？」

「ええ。失礼だけど……」

「私が大金を持っていることの理由の説明は簡単だ。私は西アルテース公国の前公主だったビーズマス卿のお抱え剣士だったのだ。当然給金は支給されていた」

「オクトーさん。失礼だけど、年収はどれくらいだったの？」

オクトーの口にした金額を聞いて、アステルは驚いた。

普通の人間が一生で稼ぐ金額に匹敵するからだ。

驚いているアステルに向けて、オクトーは笑った。

「それだけの給金が貰えるのは、一流の剣士として現役でいられる間だけだ。剣術大会の成績が悪ければ、当然給金は下がるし、ケガで引退すれば次の年の剣士としての収入は下手をすればゼロになる。大金を稼ぐことを目的にするのならば、他にもっと割りの良い仕事があるだろう」

「なら、どうして？オクトーさんはビーズマス卿のお抱え剣士になったの？」

「それは……」

オクトーは遠い過去を思い出すように、視線を遠くに向けた。

「私の父親は、剣術で出世しようとして途中で挫折した男だった。父は自分のかなえられなかった夢を私に託した。幼い頃から私は父

から剣術のスパルタ教育を受けて育った。子どもらしい遊びなど、何もさせてもらえなかった」

アステルは同情する顔になった。

「剣の稽古ばかりで辛かったんじゃない？」

オクトーは首を横に振った。

「辛くはあったが、両親は貧しい中で高い月謝のかかる一流の剣術道場に私を通わせた。私は両親の期待に何としても答えようと思った」

「オクトーさんはビーズマス卿のお抱え剣士になったのだから、見事に両親の期待にこたえたのね。今、ご両親は、どうしているの？」

アステルの質問に、オクトーはさらに視線を遠くに向けた。

「私がビーズマス卿のお抱え剣士になることが決まった時、前渡しされた支度金で今まで行ったことのない高級レストランで三人で食事することにした。両親は普段まったく飲まないワインを飲んで、嬉しそうに酔っていた」

オクトーは一度言葉を切った。

「その帰り道、酔って千鳥足だった両親は車道に飛び出してしまい、馬車に轢かれて死んでしまった」

「ごめんなさい。悪いこと聞いちゃったわね」

アステルは頭を下げた。

「謝られる必要は無い。全部過ぎ去ったことだ」

オクトーは場の雰囲気を変えようと、明るい声を作った。

「ところで、アステル殿。私に何の用で来たのだ？」

「それなんだけど……」

アステルは真剣な表情になった。

「オクトーさん。あなたは左目が見えないんじゃないの？」

同じ頃、帝都サクラスにあるホテルのカーテンを閉めきって薄暗くした一室では若い男女の声がした。

「ブルーノ。そこはもう少し丁寧にあつかって、デリケートなんだから」

「分かりました。エミー」

明日の準決勝第一試合のオクトーの対戦相手であるブルーノとその妻のエミーの声だった。

二人は昨日の抽選会が終わると、すぐに泊まっているホテルの部屋に戻った。

それから部屋をカーテンで閉めきって薄暗くして、二人きりで部屋に籠もっている。

食事はルームサービスで済ませていて、昨日以来二人は一步も部屋から出てはいない。

「あつ！？ちよつと！止めて！ブルーノ！」

エミーが大声を出した。

「そんなに乱暴に入れようとしたら、壊れちゃうわよ！もうつ！ブルーノったら美男子のくせに、意外とこういうことは不器用なんだから！」

エミーは怒ったような声を出しているが、同時にブルーノに甘える雰囲気もあった。

「わたしが美男子であることと、こういうことの得意不得意は関係無いでしょう？」

エミーは明るい声で笑った。

「えーっ！？ブルーノ。自分で自分のことを美男子って言っちゃうんだ？自意識過剰じゃない？ブルーノったら、結構ナルシストなんだ」

エミーが軽く相手をからかう口調で言ったのに対して、ブルーノも

からかう口調で返した。

「わたしのことを美男子だと、エミーは何度も言っているではないですか？」

「嘘をついたのならともかく、本当のことを言っただけで責められるなんてことはないでしょ？」

エミーは両手で軽くブルーノの顔を挟んで微笑んだ。

ブルーノも両手でエミーの顔を挟んだ。

「エミーも美人ですよ」

エミーはブルーノのその言葉に少し不安そうな顔になった。

「あの……、ブルーノ。本当にあたしと結婚して満足しているの？」

「何を突然言うのですか？エミー。気づかないうちに、わたしが夫として失格なことをしてしまったのですか？ならば言うてください。直しますから」

エミーは首を激しく横に振った。

「ううん。そうじゃないの。問題があるのは、あたしの方なの。ねえ、正直に言っただけ、ブルーノ。あたしのこと本当に美人だと思っているの？」

「もちろんですよ」

ブルーノは微塵も迷いの無い明るい声で、エミーの質問に答えた。

その答えに、エミーはますます不安そうな顔になった。

「エミー？さっきから何を不安に思っているんですか？わたしたちは夫婦なのでから心配事があるのならば、きちんと口に出してお互いに協力して解決しましょう」

「分かったわ」

エミーはうなづいたが、言いくそな顔になって数十秒黙り込んだ。

ブルーノはエミーを急かすようなことはせず。エミーが自分から口を開くのを待った。

「あのね……、ブルーノ……」

エミーはようやく口を開くと、搾り出すような声を出した。

「ブルーノ……、あなた……、ロリコンじゃないわよね？」

エミーの言葉に、ブルーノは硬直してしまい。十数秒間、何も反応できなかった。

ようやく我に返ると、ブルーノは思わず大声を出していた。

「な！何を言っているのですか！エミー！わたしが一度でも、エミーを幼女あつかいしたことがありますか？」

エミーは慌てて首と両手を振った。

「ごめんなさい。あたしの言葉の選択が悪かったわ。あたしは子どもあつかいされるのは嫌だけど、客観的に見て十歳代初めにしか見えない体をしているのは分かっているの。ブルーノと二人で街を歩いたら兄妹と思われるし、ブルーノと二人でレストランに入ったらワインを注文したのに、あたしにだけジュースを持ってくるし、あたしが一人で街を歩いていると、男子小学生にナンパされるし……」

「エミー。つまりは、何が言いたいのですか？」

エミーが延々と愚痴を続けそうになったので、ブルーノが口を挟んだ。

「つまり、こんな少女のような体で『大人の男』のブルーノを満足させられているかが心配なのよ」

ブルーノは大きく息を吐いた。

「いいですか？エミー。例えば、逆にエミーが二十歳代の『大人の女』の体をしていて、わたしの方が『十歳代初めに見える体』だとしたら、エミーは不満ですか？」

「ブルーノが十歳代初めの体……」

エミーは自分の頭の中の想像で、とても幸せそうな顔になった。

「分かったわ。ブルーノ。あたし余計な心配をしていたわ」

「それでは、続きをしましょう。エミー。入れますよ？」

「うん。優しくしてね」

何かが擦れるような音がした。

「もう！ブルーノ！乱暴にしないでって、言っているでしょ！映写機が壊れちゃうわよ！」

ブルーノは映写機にフィルムを入れようとしていた。

「案外難しい物ですね。しかし、オクトー選手の記録映像を何度も見て確信が持てました」

「あたしも同じよ。やっぱりオクトー選手は左目が見えてはいないわ」

同じ頃、帝都近衛隊の詰所にいるクラウをレジーナが訪ねていた。

レジーナはクラウが訓練場で、剣の練習をしていると思っていたが、クラウは自室にしているとクラウの部下が言った。

少し意外に思いながら、レジーナがクラウの部屋を訪ねると、クラウは机に向かって何か読んでいた。

「クラウ。何を読んでいるの？」

「日記です」

「日記？」

「そうです。ナバルに初めて会った時に僕が書いた日記とメイベルちゃんに初めて会った時に僕が書いた日記です。読み返して、その時のことを思い出しているのです」

第十二章 帝国剣術大会 休養日 その1（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

第十三章 帝国剣術大会 休養日 その2

「そう言えば、クラウと勇者くんと初めての出会いについては聞いたことなかったわね。どんなだったの？」

レジーナの質問にクラウが答えた。

「僕がナバルと初めて会ったのは、僕が小学校に入学する前の年に開かれた御前試合だったんです」

「御前試合？」

「そう。僕の父、ユーベラス公国のアキロキヤバス公王が僕と同年の子どもを集めて、子どもの剣術大会を開いたんです」

「子どもの剣術大会なんて、危険じゃないの？」

クラウは、首を軽く横に振った。

「剣は安全のために紙をまるめた物でした」

「それで、その大会にクラウと勇者くんが出場したのね？」

「決勝戦で、僕とナバルが対戦したんです。それが、僕とナバルの初めての出会いでした」

「それで？どっちが勝ったの？」

クラウは一瞬言いくそな顔になったが、答えた。

「ナバルの勝ちでした。僕の完全な敗北でした」

「戦っている内に、お互いに友情が芽生えたわけね？」

クラウは首を横に振った。

「いいえ。ナバルがその時僕のことをどう思ったのかは知りませんが、僕はナバルのことを憎く思いました」

「それは、どうして？」

「ナバルに負けるまで、僕は同い年の子どもに剣で負けたことなかったんです。今から思うと恥ずかしいですが、それまで僕は自分を『史上最強の剣士』だと思っていたんです」

「史上最強の剣士ですって!？」

レジーナは思わず吹き出して、笑ってしまった。

クラウは、レジーナを軽くにらみつけた。

「レジーナちゃん。人が真剣な話をしているのに、笑うなんて、酷いですよ!」

「ごめん。ごめん。でも気持ちは分かるわ。幼い頃は誰もが物語の中のヒーローやヒロインのようになれるものだ、と思っているものね」

「話を戻しますが……」

クラウは平静に戻った。

「僕は幼いプライドをズタズタにされて、勝負が着いた後も、自分が負けたのを認められなくて、ナバルに向けて剣を振りまわしたんです。結局。僕があきらめるまで戦いは続きました。今から考えると、それが父の狙いだったと思います」

「アキロキャバス卿の狙い？」

「はい。幼い頃、僕の周りにいる子どもは全員、父が公王であるユーベラス公国の臣民なので、僕と剣術試合をする時は、親から手加減するように言われていたのでしょう。今から考えるとあの頃の相手は、みんな弱過ぎました」

レジーナは気づいたことを口にした。

「分かったわ。アキロキャバス卿が御前試合を開いた狙いが！大勢の子どもを集めれば、中には『空気を読まずに』クラウと本気で戦う子どももいると考えたのね？」

クラウは笑った。

「確かに『空気を読まない』という意味では、ナバルは適任でした。父の目論み通りに、僕は世の中の厳しさというモノを知ることになりました」

「それで、クラウが勇者くんと仲良くなったのは、いつなの？」

「いつから、仲良くなったのか……、そう言えば、いつからなんで

しょう?」

クラウは考え込んだ

「僕が入学したユーベラス王立学校に、ナバルも剣術特待生という扱いで入学したんです」

「それで、学校で仲良くなったのね?」

クラウは、首を軽く横に振った。

「いいえ。僕はナバルをライバルとして見ていて、張り合っていたんです。剣術だけではなく、小学校では運動会の駆け競べや騎馬戦で、水泳大会の競泳や潜水で、ナバルに勝負を挑んだんです」

「結果は、どうだったの?」

「運動に関しては、僕はナバルに勝てたことは無いんです。勉強については、僕の方がナバルより上でしたが、小学校、中学校、上級校と僕とナバルは、ずっと同じクラスで、その状態が続きました」

「ずっと同じクラス?偶然で、それはありえないんじゃない?」

レジーナの言葉に、クラウはうなづいた。

「はい。今から考えると、おそらく僕の父が裏から手を回して、僕とナバルが同じクラスになるようにしたのでしょう。僕がナバルと競い合うことで、自分を鍛えるように仕向けたのでしょう」

「それで、今はクラウと勇者くんは親友なのよね?」

「はい。もちろん。そうです」

「話を戻すけど、二人が親友と呼べる仲になったのは、いつからのの？」

クラウは、また考え込んだ。

「いつから親友になっていたのかは分かりませんが、僕がナバルと親友だったんだと分かった瞬間にあります」

「親友だと分かった瞬間？」

「はい。学校を卒業して、ナバルが地元に残ることになり、僕が帝都近衛隊に入隊するために帝都サクラスに旅立つ時のことでした」

クラウは、遠い記憶を思い出す顔になった。

「僕は『これでナバルと別れられる』とむしろ清々した気分でした。でも馬車に乗る直前に、ナバルが見送りに来て、笑顔で『元気でな』と言ったんです」

クラウが遠くに向ける視線は、古き良き思い出へのモノだった。

「ナバルのことですから一言そう言っただけで、饞別に何か僕に特別な物をくれたわけじゃありませんでしたが、馬車が走り出した途端に、僕は泣いてしまいました」

レジーナは、慈しむ目でクラウを見た。

「自分が本当は別れを悲しんでいることが、分かったのね？クラウド」

「そうです。レジーナちゃん。僕が泣いたことをナバルに話しちゃダメですよ。これは誰にも言ったことなかったんですから」

「分かったわ。でも誰にも話さなかったことを、あたしに話してくれるってことは、それだけ、あたしを信用しているってことね？」

レジーナは、意味深な笑みをクラウドに向けた。

「そうですよ。レジーナちゃんは人の秘密を言い触らすような人じゃ、ないでしょう？」

「そう思ってくれてるんだ」

レジーナは、微笑んだ。

クラウドは、レジーナの微笑みに気づくことなく話を戻した。

「だから、ナバルが帝都近衛隊の入隊試験を受けるために帝都に来て、再会できたのは嬉しかったです。帝都をナバルに僕が観光案内している時に、僕がメイベルちゃんをナバルに紹介したんですが……」

クラウドは苦笑いした。

「それが僕の人生での最大の失敗かもしれません。まさか、ナバルが僕の恋のライバルにもなるとは、しかも完全に僕の負けのようです」

レジーナは、疑問を口にした。

「クラウドは、勇者ちゃんとメイベルの関係が壊れるようなことは無い
と、思っているのね？」

「はい。あの二人の絆は、僕がどうこうしたって、壊れるようなモノ
ではありません」

「でも、クラウドがメイベルのことを諦めてるようには見えないのだ
けど？」

クラウドは、自嘲する顔になった。

「理屈では納得していても、感情の方が納得していないという状況
なんです。自分で情けないですが、感情も納得するとしたら、その
時を待たなければならぬでしょう」

「その時って、いつなの？」

「メイベルちゃんとナバルの結婚式です。その時、僕は人前で恥ず
かしくなるほど大泣きして、メイベルちゃんのことを本当に諦めら
れるでしょう」

「そうなんだ。じゃあ、クラウドは新しい恋をする気はあるのね？」

「はい。そのためにも、あの二人には早く結婚の当たりくじを引い
てもらいたいものです」

レジーナはクラウドの言葉に納得するように、何度もうなづいた。

「それなら、剣術大会で勇者くんと戦うのは、メイベルとは関係無いのね？」

「はい。純粹にナバルと剣術で勝負を着けただけです」

その言葉にうなづくと、レジーナは真剣な表情になって、クラウドに質問した。

「最後にもう一つ質問なんだけど、クラウドとメイベルの最初の出会いはどんなで、何故、クラウドはメイベルを好きになったの？」

クラウドも真剣な表情になって答えた。

「それは僕の大事な思い出なので、僕の心の中に大切にしまっておきたいんです。レジーナちゃんにも話せません」

「そう……、分かったわ。無理には聞かないわ」

レジーナは少し寂しそうな声で応じた。

「ところで、レジーナちゃんは、僕に何の用で来たのですか？」

「クラウドに聞きたいことがあったの。それは、もう済んだから帰るわ。明日の試合頑張ってね」

同じ頃、帝都サクラスの中央市場に一組の男女がいた。

メイベルとナバルである。

中央市場は緩やかな階段状に作られた大きな広場にあり、数多くの露店が所狭しと並んでいて、大勢の人たちで溢れていた。

「ねえ？ナバル。この場所覚えている？」

「俺とメイベルが初めて会った場所だろ？」

「覚えててくれたんだ！」

メイベルは笑顔になった。

いつもはメイベルは聖女服、ナバルは近衛隊の制服を着ているが、今は目立たないように普通の服を着ている。

「ここにナバルともう一度一緒に来たかったんだけど、なかなか時間が取れなくて、やっと今日来れたわ」

「ここでメイベルとパセラさんが買い物をしていて、クラウに観光案内されていた俺が通りかかって……」

突然、ナバルが黙り込んだ。

「どうしたの？ナバル。突然、黙ったりして？」

「メイベル。俺はここでクラウにメイベルに紹介されたんだよね？」

「そうよ」

「と言うことは、クラウドとは俺より前から知り合いだったんだよね？」

「当たり前じゃない」

「今まで聞いたことなかったが、メイベルとクラウドとの初めての出会いは、どんなだったんだ？」

メイベルは「えっ!？」といった感じの顔になって、考え込んだ。

「そう言えば、どこかでクラウドさんとは最初の出会いをしているはずよね。うーん。思い出せないわね。何で、このこと聞くの？ナバル」

「クラウドはメイベルに会った時に、愛の告白しているだろ？」

「そうね。わたしの方が恥ずかしくなっちゃうけど」

「でも、メイベルはクラウドと付き合う気にはならなかったんだな？」

「うん。全然、そんな気にはならなかったわ」

「メイベルのことをハッキリと好きだと言わなかった俺の方を、好きになってくれたのは、何故だ？」

メイベルは愛しい人を見る目になって、ナバルを見つめた。

「理由なんて無いわ。だけど、わたしが『ナバルが好き』という気持ちだけは確かにここに有るわ」

メイベルはナバルの右手をつかんで、自分の心臓の上に押しつけた。

「心臓が激しく動いてるでしょ？ナバルと一緒にいるだけで、こんなにドキドキしているのよ」

「『心臓は血液を体内に循環させるためのポンプ』って言ったメイベルにしては、非科学的な答えだな」

「恋する気持ちは科学じゃ、計れないわ」

二人は、手をつないでしばらく市場を見物して回った。

帝都サクラスで、夕日が沈み、朝日が登って来た。

帝国剣術大会準決勝当日となった。

午前中に行われる第一試合は、オクトー対ブルーノである。

第十三章 帝国剣術大会 休養日 その2（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

第十四章 帝国剣術大会 準決勝第一試合 オクトー対ブルーノ

帝国剣術大会に出場する選手は、ソルティス教会の医療係による健康診断を受ける。

試合当日の朝に行われるそれで、身体に異常があると診断されれば、ドクターストップになる。

「オクトーさん。やっぱり、あなたは左目を失明しているのね？」

帝立競技場内の医務室で、ティアマリアは診察を終えると、厳しい目でオクトーを見た。

「その通りだ。私の左目は二年ほど前にケガが原因で、まったく見えなくなった」

オクトーは、あっさりと認めた。

「今までの試合前の視力検査は、どうしてたの？……って、愚問だったわね。両目の視力を検査はするけど、片目ずつはしないものね」

「ところで、私の左目が失明しているのに、何故気づいたのだ？」

オクトーの質問にティアマリアは答えずに、同席しているアステルの方を見た。

アステルが口を開いた。

「オクトーさんは、顔中髪の毛と髭で覆われているから分かりづら

かったけど、一緒に書類の整理をしてもらった時に気づいたの、オクトーさんが右目だけで書類を読んでいることに」

「なるほど、それを知られのを避ける目的もあって、顔を髪と髭で覆っていたのだから」

「それにしても、医療系のわたしが気づかなかったのに、天文係のアステルが気づくなんて……」

ティアマリアは悔しそうだった。

「それは単純に私と一緒にいた時間の長さの違いであろう。ティアマリア殿は剣術大会で選手に負傷者が出た場合に備えて、大会中は競技場でずっと待機していたので、私とほとんど会わなかったが、私の試合が無い日はアステル殿の仕事を、私は手伝っていたからな」

ティアマリアは、オクトーの言葉にうなづいた。

今度は、アステルが質問した。

「でも、左目が見えないのに、今までの試合は、どうやって勝ってきたの？」

「試合開始の時は、相手は必ず真っ正面にいる。左目が見えなくても関係無い。最初の一撃で私が勝負を決めていたのは、私の弱点をカバーする意味もあった」

ティアマリアは、オクトーをさらに厳しい目で見た。

「とにかく、オクトーさんの左目が失明していると分かった以上は、

わたしは医師としてドクターストップを宣告……」

「私にドクターストップを宣告することはできないぞ。ティアマリア殿」

「それは、何故？」

「帝国剣術大会には、過去には片目が失明した選手が出場した前例がある。前例がある以上、私に場合も同じようにあつかわれるはずだ」

アステルが口を挟んだ。

「その記録は、わたしも読んだわ。オクトーさんと一緒に書類を探したのだから。でも、その選手は失明した目の側に対戦相手が回り込んで、負けているじゃない！わたしたちはオクトーさんの目のことを言い触らすつもりはないけど、勇者くんたちに気づかれたら、どうするの？」

「ナバルだけでなく、ブルーノ殿やクラウ殿も、三人とも剣士として一流だ。とくに私の目のことには気づいているだろう」

「だったらなんで？負けると分かっているのに、試合に出ようとするの？意地とかプライドのため？」

「アステル殿」

オクトーは厳しい声を出した。

「私は『プロ』だ。『やってみなくちゃ、分からない』とか『一か

八かの勝負』が許されるのは『アマチュア』だと、私は思っている。私なりに勝算があるから試合に出るのだ」

オクトーは、アステルとティアマリアに説明を始めた。

その日、帝国剣術大会準決勝第一試合が始まる時刻が近づくと、サクラス帝国全土の教会や広場にある有線放送の受信機、そして高価であるためまだ数は少ないが、一般家庭にある受信機のひとつ全てが一斉に同じチャンネルに合わされた。

「サクラス帝国全土のみなさま、こんにちば。こちらは帝都サクラスにあります帝立競技場。間もなく帝国剣術大会準決勝第一試合オクトー選手対ブルーノ選手が行われます。わたくしは実況担当のレジーナ・テルルです」

受信機のスピーカーから、レジーナの声が流れた。

「解説はおなじみのクリプトン卿です。そして今回は特別ゲストを二人、放送席にお招きしています。アステル・ラガナンさん。エミィ・アサッシニオさんお願いいたします」

「よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

アステルとエミィの声が流れた。

「さて、エミーさんはブルーノ選手の奥さまとして全国的に有名になりましたが、アステルさんについては放送をお聞きになっている皆さまの中には知らない人もおられるかと思うので、解説いたします」

ここで、レジーナは一拍おいた。

「アステル・ラガナンさんは、ソルティス教聖サクラス教会の女性神官であり、星の四つの天文係で、時計係を務められており、毎日のように太陽を観測して、正確な時刻を計算し、帝国標準時を決めております。まさしくアステルさんが決めた時刻に従って、帝国は動いているのです」

「もうっ！大げさよ。レジーナさん」

アステルは笑った。

「さて、アステルさんはオクトー選手が修行されていた山の中で出会った。帝都サクラスと一緒に来られてからは、オクトーさんに書類の整理を手伝ってもらっているそうですね？普段のオクトーさんは、どんな感じなのでしょう？」

「生真面目な人ってところね。剣の練習をしている時も、わたしと二人きりで書類の整理をしている時も、ものすごく集中していて、他の事は気に掛けないわね」

「ねえ、ねえ、アステルさん」

エミーが興味津々な感じで、アステルに声をかけた。

「何ですか？エミーさん」

「アステルさんは、オクトーさんと二人きりになることが多いの？」

「はい、天文係の書類の整理の時に……」

「その時、変な気持ちにならない？」

「変な気持ちって、何ですか？」

「もうっ！とぼけないで！恋よ！恋！アステルさん。オクトーさんに恋愛感情持つてるんじゃない？」

「なっ！？」

意表を突かれたアステルは、顔を赤くした。

「顔が赤くなったわね。凶星だったのかしら？」

「エミーさん！変なこと言わないでください！わたしとオクトーさんはそんな関係じゃありません」

「あんな『森の熊さん』みたいな人は、アステルさんの好みじゃないわけ？」

「そういう意味じゃありません！男女の仲を、そんなふうに言うなんて、エミーさんは、まるで『オバサン』ですよ！」

「あたしが『オバサン』？」

アステルは「しまった！」と思った。

世間の一般常識として「オバサン」と判断されるような年齢の女性でも、「オバサン」呼ばわりされると普通怒る。

エミーはまだ二十歳代後半なので、アステルはエミーを怒らせてしまったと思った。

「アステルさん。もう一度、あたしのこと『オバサン』って言うて！」

アステルの予想に反して、エミーは顔も声も嬉しそうだった。

「オバサン」

「もっと、言うて！」

「オバサン、オバサン」

アステルが「オバサン」と言うたびに、エミーはますます嬉しそうだった。

「あの？エミーさん。『オバサン』って呼ばれて嬉しいんですか？」

アステルの質問に、エミーは笑顔で答えた。

「ええ、嬉しいわ。あたし年下からも『お嬢ちゃん』って呼ばれるから、『オバサン』って呼ばれるの嬉しいの」

「そ、そうなんですか……」

レジーナがマイクに向かって声を出した。

「オクトー、ブルーノ両選手が入場して来ました！」

アステルもエミーも、試合場に視線を向けた。

アステルはオクトーの姿を見ると、考えた。

（やだっ！エミーさんが変な事言うから、オクトーさんのことを変に意識しちゃうじゃない！わたしにとってオクトーさんは、何なんだろう？オクトーさんは、わたしのことどう思っているのだろう？）

アステルの思考と関係なく、試合は始まった。

主審の試合開始の合図と同時に、オクトーは木刀を前に突き出したが、ブルーノはオクトーの左目の方向に魔法で飛んで避けた。

オクトーは、アステルとティアマリアに話した勝算について思い出していた。

（私は魔法を使うことはできないが、他人が魔法を使った時の波動を感じるができる。ブルーノ殿が超低空飛行魔法を使えば波動から位置が分かる）

ブルーノが自分の左の方に飛んだのは、オクトーにとって予想の範囲内だった。

（やはり、私の左目が見えないことは見破られていたか、だが魔法

の波動は感じる！それで位置が……）

オクトーは戸惑った。

（なんだ！？波動が感じられなくなった。ブルーノ殿の気配も感じない。そうか！）

有線放送の受信機からは、レジーナの実況放送が流れていた。

「ブルーノ選手！オクトー選手の左目側に飛行魔法で回り込みましたが、すぐ着地して、オクトー選手の左側約十メートル離れた地面に着地した後、亀のようにゆっくりと歩いてオクトー選手に近づいて行きます！」

「ここまででは、計算通りね」

「どういふことなのでしょう？エミーさん」

「記録映像を見て、オクトー選手は右目だけで相手を見ていることから、左目が見えないことは分かっていたわ。だけど、飛行魔法を使う相手には左側に回り込まれても対応できている。そのことからオクトー選手は魔法の波動を感じることができるのも分かったわ」

「それで、飛行魔法をすぐ止めて、地面を歩いているのですね。あの亀のような歩みは何ですか？」

「あたしとブルーノは、南アルテース軍に所属していた元軍人なの。敵の基地にこっそり忍び込むような任務もあったわ。あの歩き方は足音も気配も消えるわ」

「なるほど、あつ！オクトー選手！ブルーノ選手に左側を向けたまま微動だにしません！これは、どういふことなのでしょう？」

解説のクリプトン卿が口を開いた。

「オクトー選手は、ブルーノ選手の魔力の波動も気配も感じられないので、あえて動かないことで、ブルーノ選手の一撃を受けて、それで位置を確認してから反撃をする気だ」

「一撃でブルーノは決めるわ。オクトー選手に反撃の余裕は無いわ」

エミーは断言した。

レジーナは叫んだ。

「ブルーノ選手！オクトー選手の頭部に強烈な一撃！オクトー選手、頭から大出血！勝負は決まりました！」

観客席から大歓迎が上がった。

「いえ……、待ってください！オクトー選手、倒れません！木刀を横に振りました。あつ！ブルーノ選手の左腕が不自然に曲がっています！ブルーノ選手！審判にギブアップを申告！オクトー選手の勝ちです！」

試合終了後、オクトーとブルーノは競技場の中にあるそれぞれ別の

医務室に運ばれた。

「治療魔法で骨折した左腕はすぐに治るそうよ。運動能力を元に戻すには数ヶ月のリハビリが必要だそうだけど……」

エミーは医務室のベッドに横たわるブルーノを心配そうに覗き込んだ。

「そうですか、政治家として活動するには支障無いということですね」

「やっぱり、片腕でもまだやれたのに、ギブアップしたのは、あのまま続けていたら数ヶ月の入院しなきゃならない大ケガするかもしれないと思ったからね？」

「そうです。そうなれば『政治家』としての活動に支障が出ます。わたしはもう『剣士』ではなく『政治家』なのです。そんな当たり前のことに、自分が気づくのに手間をかけてしまつてすみませんでした。エミー」

「いいのよ。あたしたち夫婦でしょ？前にも言ったように、あなたが何をしようと一緒に生きていくわ」

一方、別の医務室に運ばれたオクトーは、ティアマリアの診察を受けていた。

「髪の毛と髭が邪魔で、傷口が見えにくいわね。オクトーさん。髪を切って、髭を剃らせてもらっわよ？」

「ああ、構わない」

「わたしがやるわ」

アステルがハサミと髭剃りを手に取った。

「えっ!？」

髪を切り、髭を剃ったオクトーの顔を見て、アステルは驚いた。

午後からは、準決勝第二試合ナバル対クラウが行われる。

第十四章 帝国剣術大会 準決勝第一試合 オクトー対ブルーノ（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8639p/>

くじびき勇者さま 外伝 誰が真優勝者だ！？

2011年9月26日00時01分発行